令和３年度

研究活動報告

桜美林大学 老年学総合研究所

はじめに

皆様におかれましては時下益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

ここに2021（令和３）年度の老年学総合研究所活動報告書を、長く続くコロナ禍にもかかわらず、お届けできますことを嬉しく思います。

老年学総合研究所は、超高齢社会を迎えた我が国において、より明確に「老年学」という、高齢者を取り巻く広範な課題に適切に対処できる研究機関であるとともに、広く社会一般の方々に「老年学」の重要性とさまざまな課題について、総合的な情報発信の中核的機関として、知っていただくことを目標に掲げております。現在、研究所の陣容としては研究員６名（本学の大学院老年学学位プログラムの教員をかねております）、および連携研究員35名を擁する老年学の総合的な研究所といえる構成となっております。本研究所は、研究活動は勿論のこと、修士課程、博士課程に在籍する本学の大学院生に対して老年学のさまざまな課題に関しての実習の場としても利用されております。

令和３年度も、感染者の増減を繰り返す新型コロナウイルス禍の状況においては、フィールドワークを伴う調査研究を推進していくことが非常に困難な時期でした。その一方で、高齢者や高齢者を取り巻く状況に対して、新型コロナウイルスの感染が及ぼす様々な影響を明らかにする調査研究が求められています。研究所の活動に様々な制約が課せられたにもかかわらず、研究所研究員および連携研究員の皆様のご努力の成果がこの活動報告書に結実しております。また、本報告書の作成・刊行にあたっては、桜美林大学総合研究機構並びに老年学総合研究所の事務担当のご尽力もいただき、ここに厚くお礼を申し上げたいと思います。

今後も桜美林大学老年学総合研究所に対する温かいご理解とご支援、そして厳しいご指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2022年3月

桜美林大学　老年学総合研究所

所　長　中　谷　陽　明

桜美林大学　老年学総合研究所

令和３年度　研究活動報告

研究員（常勤）研究活動報告

1）　長田　久雄 …… 1

2）　杉澤　秀博 …… 2

3）　鈴木　隆雄 …… 6

4）　中谷　陽明 …… 12

5）　新野　直明 …… 14

6）　渡辺修一郎 …… 16

連携研究員研究活動報告

1）　青木　宏心 …… 21

2）　浅野　文孝 …… 23

3）　有田　昌代 …… 24

4）　池田　晋平 …… 26

5）　遠田　恵子 …… 28

6）　押切　康子 …… 31

7）　葛　　輝子 …… 32

8）　城戸亜希子 …… 33

9）　久米喜代美 …… 34

10）　小林由美子 …… 35

11）　柴崎　雄悟 …… 37

12）　鈴木　知明 …… 38

13）　関野　明子 …… 39

14）　孫　　潔 …… 40

15)　東方　和子 …… 45
16)　徳田　直子 …… 46
17)　殿原　慶三 …… 47
18)　友永　美帆 …… 48
19)　萩原真由美 …… 49
20)　橋本由美子 …… 51
21)　平林　規好 …… 52
22)　藤井　　顕 …… 53
23)　ブラナン純代 …… 54
24)　堀内　裕子 …… 56
25)　牧野公美子 …… 58
26)　松井　康祐 …… 60
27)　松永　博子 …… 61
28)　三澤　久恵 …… 63
29)　山岡　郁子 …… 64
30)　吉江　妙実 …… 65
31)　吉田　綾子 …… 66
32)　楽　　冠妤 …… 67

研究員　長　田　久　雄

１．研究課題

高齢者の心理的適応に関する研究

２．研究活動の概要

昨年度に引き続き、心理機能の加齢変化に関して、加齢性難聴への対応の研究は継続している。認知症の人と家族に対する一体型支援に関する研究も、認知症介護研究・研修仙台センターと共同で行った。

３．研究業績

【著書】

１）杉澤秀博・長田久雄・渡辺修一郎・中谷陽明編、老年学を学ぶ　高齢社会の学際的研究、桜美林大学出版会 桜美林大学叢書、論創社、2021.12.10

【論文】

１）森下久美・渡辺修一郎・長田久雄、シルバー人材センター会員における屋外作業時の疲労対処行動：運動機能と認知機能の類型による比較、日本公衆衛生雑誌、第68巻第８号、564－571、2021.8.15.

２）田辺毅彦・長田久雄、特別養護老人ホームにおけるユニットケア研修と介護職員のバーンアウトの関連、応用老年学、第15巻１号、48－57、2021.8.31.

３）小野真由子・藤野秀美・横井郁子・長田久雄、高齢者における「感謝」の研究の文献レビュー、ウェルビーングおよび精神的健康との関係に着目して、応用老年学、第15巻１号、75－85、2021.8.31

【科研費などの助成金】

１）研究分担者：佐藤美由紀（代表者）　研究種目　基盤研究（C）　課題番号　18K10623　研究科題名：当事者参加型アクションリサーチによる認知症の人と家族介護者にやさしい共生社会創造

研究員　杉　澤　秀　博

1．研究課題

（1）高齢者の健康格差に関する研究
（2）高齢者の就業推進に関する研究
（3）慢性疾患患者の療養生活の安定に関する研究
（4）『老年学を学ぶ』の執筆・編集・出版

2．研究活動の概要

（1）高齢者の健康格差に関する研究

疾病への罹患や疾病への罹患に伴う日常生活の自立度の低下の割合については，社会経済階層が低い高齢者の間で高いことが明らかにされている．しかし，疾病への罹患や生活上の支障が発生した後の対応に関しては，社会経済階層による格差があるか否かについては解明が遅れている．介護支援専門員は，日常生活の自立度に支障のある高齢者に対して，介護サービスを調整することで療養生活の安定を図る支援をしている．本研究では，介護支援専門員が担当する地域の高齢者の社会経済階層の違いによって，サービス調整に支障をきたす経験に差があるか否かを明らかにすることを目的とした．分析するためのデータを収集するため，今年度は以下のような調査を行った．まず，東京都23区の中で，高齢者の社会経済階層が高位の区と低位の区それぞれ6区，計12区の全介護支援事業所に対して介護支援専門員を対象とした調査の協力依頼を行った．調査協力の承諾を得た事業所の全介護支援専門員に対して郵送調査を実施した．次年度，このデータを分析する予定である．本研究は，科学研究費助成事業「高齢者における社会的不利の重層化の機序とその制御要因の解明」（研究代表者：杉澤秀博）の助成を受けて行った．共同研究者は，柳沢志津子氏（徳島大学），北島洋美（日本体育大学），原田謙氏（実践女子大学），杉原陽子氏（東京都立大学），新名正弥氏（田園調布学園大学），である．

（2）高齢者の就業推進に関する研究

職場における高齢者差別の実態とその関連要因については，欧米では研究が進んでいるものの，日本では研究蓄積に乏しい．本研究では，職場における高齢者差別に関する中高年就業者の認知とその関連要因を，ミクロ（個人）・メゾ（企業）・マクロ（制度）の面から包括的に解明することを目的とした．分析データは，1999年と2016年に全国55～64歳の男性それぞれ4,000人と2,000人を対象に実施した調査から得られた．高齢者差別については高齢という理由で左遷された

り，意見が無視されたり，退職の強制がなされたりという差別的扱いがあるか否かで評価した．ミクロ要因には，精神労働，肉体労働，コンピュータの利用，サポートの多寡などの仕事特性，病気による休暇の経験，メゾ要因には企業の高齢者施策，企業規模，産業，人員削減，マクロ要因には65歳までの雇用保障制度の充実度が異なる1999年と2016年の比較を位置付けた．分析の結果，ミクロ要因については病気による休暇の経験がある人，上司からのサポートが低い人，メゾ要因では人員削減が行われた企業に属する人で，高齢者差別の認知が有意に高かった．マクロ要因については，2016年では1999年と比較して高齢者差別があるとの認知が有意に低かった．ミクロ・メゾ要因とマクロ要因との交互作用については，有意なものは観察されなかった．以上から，職場における高齢者差別は中高年者の就業推進策が進展した2000年以降で改善傾向にあること，しかし，ミクロ要因とメゾ要因の影響は継続していることが示唆された．本研究の成果は欧文誌に投稿予定である．本研究は，科学研究費助成事業「高齢者における社会的不利の重層化の機序とその制御要因の解明」（研究代表者：杉澤秀博）の助成を受けて行った．共同研究者は，原田謙氏（実践女子大学），杉原陽子氏（東京都立大学），柳沢志津子氏（徳島大学），新名正弥氏（田園調布学園大学），北島洋美氏（日本体育大学）である．

（３）慢性疾患患者の療養生活の安定に関する研究

１）透析患者の介護体制に関する研究

透析患者は，要介護状態になるリスクが高いことから，介護体制の整備・拡充が喫緊の課題である．日本では，介護保険制度の導入に見られるように，家族介護に依存した介護を介護サービスによって代替あるいは補完していこうという介護の社会化施策が推進されてきた．しかし，最近では，介護保険制度の財源の健全化を図るため，介護サービスの利用制限策が導入されるなどの制度変更が行われている．一般の要介護高齢者については，このような制度の導入・変更によって介護体制がどのように変化してきているかに関する研究が行われてきているものの，透析患者については介護体制の変化，さらにその変化と介護保険制度の導入・変更との関連に言及した研究がない．本研究の目的は，透析患者を対象に，この課題を解明することにある．そのため，今年度は，データベースの作成のため日本透析医会の会員施設の通院患者を対象に調査を行った．次年度では，収集されたデータと既存のデータをマージし，上記の課題を分析する予定であり，研究成果は欧文誌に投稿する．本研究は，2021年度「学内学術研究振興費」（研究代表者：杉澤秀博）の助成を受けて行うとともに，透析医療研究会（研究代表者：杉澤秀博）の研究の一環として，篠田俊雄氏（日本透析医会），清水由美子氏（東京慈恵会医科大学），熊谷たまき氏（大阪市立大学）と共同で行っている．

２）食事制限の実行に対する主治医の評価と透析患者の自己申告との不一致

透析患者の健康維持には厳しい食事制限の実施が不可欠であるものの，患者の食事制限の実行度が低いことが問題視されている．実行度を高めるには，患者の実行度を主治医が正確に評価し，低い場合には必要な支援を行うことが必要である．しかし，患者の食事制限の実行度を主治医がどの程度正確に理解しているのか，主治医の理解度が低い場合にはその要因は何かについて

の研究はない．本研究では，患者の自己申告による食事制限の実行度と主治医の評価との不一致の程度，およびその関連要因の解明を目的とした．分析データは，2016年に全国約100か所の透析施設に通院する患者全数を対象に行った調査から得られた．分析の結果，患者の自己申告による食事制限の実行度とそれに対する主治医の評価との間の不一致が大きいこと，不一致の要因には，血液検査データの数値，透析に伴う合併症の数，透析の原因疾患が糖尿病であること，日常生活動作に障害があることが関連していることが明らかになった．この研究成果は欧文誌に投稿中である．

（4）『老年学を学ぶ』の編集・出版

学際的な老年学を系統的に学習できるテキスト『老年学を学ぶ』を，長田（老年心理学担当），渡辺（老年医学担当），中谷（老年社会福祉学担当）の各教授と共同で編集・出版した．出版については，桜美林大学出版会の「出版助成」を受けた．

３．研究業績

【著書】

1）杉澤秀博，長田久雄，渡辺修一郎，中谷陽明　編著．2021．老年学を学ぶ：高齢社会の学際的研究．桜美林大学出版会．

2）潮谷有二，杉澤秀博，武田丈　編著．2022．社会福祉調査の基礎．ミネルヴァ書房．

【論文】査読付き

1）Sugisawa, H., Shimizu, Y., Kumagai, T., Shishido, K., Shinoda, T. 2022. Influences of financial strains over the life course before initiating hemodialysis on health outcomes among older Japanese patients: A retrospective study in Japan. International Journal of Nephrology and Renovascular Disease, 15, 1－13.

2）Sugisawa, H. 2022. Psychosocial predictors of young male workers' discrimination against older workers in Japan: Comparison of four models. Ageing & Society（in press）.

3）清水由美子，熊谷たまき，杉澤秀博，篠田俊雄，宍戸寛治，馬上和久．2022．透析施設の災害対策の推進要因：先進事例の分析．保健医療科学，70（5），569－578.

4）牧野公美子，杉澤秀博，白柳聡美．2022．満足のいく施設内看取りの決断ができた家族に対して看護師が行っていた代理意思決定支援．老年学雑誌，12（印刷中）

5）友永美帆，野村知子，杉澤秀博．2022．社会的孤立の高齢者に対する「聞き書き」による自分史作成と地域交流拠点への参加による支援の有効性．老年学雑誌，12（印刷中）

6）松井康祐，杉澤秀博．2022．高齢者の健康習慣におけるヘルスリテラシーの効果に関する研究．老年学雑誌，12（印刷中）

7）柴﨑雄悟，杉澤秀博．2022．大都市における生活支援コーディネーターの地域づくりへの取

り組みに関する質的研究．老年学雑誌，12（印刷中）

8）八子久美子，杉澤秀博．2022．日本における外国人介護労働者の就業継続プロセス．老年学雑誌，12（印刷中）

9）孫潔，杉澤秀博．2021．高齢者における主観的な学習ニーズ及び学習経験に関する評価指標の作成．応用老年学，15（1），58－67.

10）島影真奈美，杉澤秀博．2021．ホテル業界における高年齢従業員に期待される役割に関する質的研究：SCAT法を用いて．応用老年学，15（1），68－74.

【学会発表，座長】（筆頭著者のみ）

1）杉澤秀博，清水由美子，熊谷たまき．高齢透析患者の身体的・精神的健康に与える透析導入前のライフコース上の経済的困窮の影響．日本老年社会科学会第63回大会．WEB開催．2021．6.12－13.

【科研費などの助成金】

1）科研費（基盤（A））．高齢者における社会的不利の重層化の機序とその制御要因の解明（研究代表者）.

2）学内学術研究振興費．高齢透析患者における介護資源の利用意向の変化：介護保険制度導入・改定の影響（研究代表者）.

研究員　鈴　木　隆　雄

１．研究課題

日本人高齢者における乳・乳製品と認知機能に関する調査・研究

２．はじめに（文献的考察）

1. 高齢期の栄養と認知機能・認知症について

一般的に認知症高齢者においては、体重低下を伴う低栄養状態が指摘されている。世界8カ国のコホートデータを分析したAlbanese E st.al.（2013）の研究によれば、認知機能障害のある16,538人の高齢者について、認知症の重症度と体重減少は高い関連性を示していることが報告されている。また欧州静脈経腸栄養学会（ESPEN）の認知症高齢者の栄養管理に関するガイドライン（Volkert D, et al. 2015）によれば、認知症あるいは認知機能障害高齢者は低栄養状態となるハイリスク者であるが、一方、低栄養はまた認知機能低下や認知症発症のリスクでもあり両者の関係性は「悪循環」であることが報告されている。

従って認知機能低下あるいは認知症に関する予防対策として、栄養・食事の介入は極めて重要な課題となる。最近、世界保健機構WHOから提出された“WHO Guidelines for risk reduction of cognitive decline and dementia”（2019）によれば、推奨度は「限定的」であるが、食事による認知機能低下あるいは認知症に対する予防の可能性が指摘されている。その代表例として「地中海食」が５つのランダム化比較試験に基づくシステマティック・レビューおよびメタ分析により、言語記憶や視覚記憶に有意な効果が認められている。また我が国では宮城県でのOhsakiコホート研究において、日本食パターンが認知症発症に対して予防的な関連性のあったことが報告されている（Tomata Y et al. J Geront, 2016）。この研究での日本食とは魚、野菜、キノコ、いも、海藻、大豆製品、果物をよく摂取することを特徴としたものである。

2. 高齢期における乳・乳製品の摂取と認知機能及び認知症について

本課題に関しても数多くの研究があるが、ここではまず2019年のCuesta-Triana F et al による直近のシステマティック・レビュー（SR）を紹介する。本SRは、乳・乳製品摂取が高齢者のフレイル、サルコペニアおよび認知機能に関する2009年～2018年までのPubMed, Cochran Reviewなどから体系的に検索された観察型研究および介入型研究を抽出し選択したものである。対象の可能性となる303論文からPRISMAによる選択基準に合致した25論文を精査し、メタ解析としては６研究（５つの観察型前向きコホート研究および１つのランダム化比較試験RCT）を対象としている。その結果、認知障

害に関してはその関係性については研究間での異質性が強いことから明確に確立することは出来なかった。本SRでは選択基準に合致しているわずか6研究においてすら、各研究の精度の高いことは充分評価されているものの、各研究間のデータ調整にとよって得られた結果は非常に不一致性の強いことが明らかにされている。例えば我が国のコホート研究（久山町研究）から得られた結果では、乳製品摂取がアルツハイマー病（AD）の発症との間に有意な逆相関を示し、AD発症は第１四分位（最低摂取群）と比較し、第２、第３および第４四分位（最高摂取群）では、いずれも調整済みHazard Ratioが有意に低下していることを明らかにしている（Ozawa et al. JAGS, 2014）。しかし、一方で4,809人の中年期～高齢期女性を対象としたフランスのコホート研究（Vercambre et al. Br J Natr, 2009）では、乳製品のデザートとアイスクリームの消費量が多い女性では、高齢期の認知機能低下のリスクが報告され、同様に3,076名高年齢者を対象としたフランスの研究（Kesse-Guyot et al. 2016, J Nutr. Heal Aging）では中年期の牛乳の大量消費は言語記憶と負の関連性が指摘されている。また米国の13,752名を対象としたコホート研究（Petruski-Ivleva et al. Nutrients, 2017）の結果では、中年期の牛乳摂取量が多い程、20年間の認知機能低下率は高くなる可能性が示唆されている。

同様に、2018年のLee J et al. のSR とMeta-analysis においても７コホート研究と1 RCT研究を対象とした分析の結果、採択された研究間の方法論的な差異および臨床的異質性があまりにも大きく、本来の目的としたDose-response meta-analysis の実施は不可能であったと報告している。また乳・乳製品摂取と認知機能の変動についても有意な結果は得られていない（最低位と最高位における調整したRR=1.21；95%CI： 0.81, 1.82,）。したがって現時点におけるエビデンスを確定することは極めて困難と結論付けている。

以上のように、乳・乳製品摂取と認知機能低下（抑制）あるいは認知症発症の研究ではその対象者、地域、測定方法、結果（Out-come）の選択等々において極めて強い異質性が存在することは明らかであり、世界的な視点での確定的な結論を得ることは非常に困難である。今後本研究の方向性や戦略としては、日本人高齢者を対象とした標準化された精度の高い方法によるコホート研究やランダム化比較試験を蓄積し、欧米人との乳・乳製品の摂取量や種類などが大きく異なる日本人高齢者集団においてSRやメタ解析を実施できるよう研究を重ねていくことが（現時点では）最も重要な課題と考えられる。

令和３年度研究結果報告

都市部在住高齢者におけるチーズ摂取と認知機能との関連性について、上述のように、認知機能の低下は、身体的障害、IADL低下、死亡と密接に関わり、要介護状態となる主な原因である。認知機能の低下には様々な要因が関連するが、食習慣との関連性についての解析は十分とは言えない。ここでは都市部在住高齢者におけるチーズ摂取習慣と認知機能との関連を解明することを目的として、横断的研究を実施した。具体的には、2019年９月に65歳以上の都市部（東京都板橋区）在住高齢男女1,515人を対象に包括的健診（「お達者健診」）を行い、体格（身長・体重）、筋力（握力・膝伸展

力）、歩行速度（通常・最大）、聞き取り調査（痛み・転倒・外出頻度・GDS等々）、認知機能（MMSE）のデータを収集し、MMSE26点以下を軽度認知機能低下（MCI）と定義した。さらに、１：１の面接調査より１週間の10品（魚介類、肉類、卵、牛乳、大豆製品、緑黄色野菜、海藻、いも類、果物、油脂類）とチーズの摂取頻度・種類・食べ方を調査した。チーズ摂取頻度に欠損値がないデータを分析した。

その結果、対象者は男性278名、女性1,239名であり、対象者の属性、乳・乳製品特にチーズの摂取に関してのデータを表１～表７に示す。

表１　対象者の属性

項目	全体	男性	女性
年齢（歳）	76.38±4.81	79.36±3.05	75.72±4.88
身長（cm）	153.20±7.04	162.41±5.88	151.15±5.45
体重（kg）	53.44±9.24	61.62±9.13	51.62±8.23
体脂肪率（%）	29.47±8.92	27.22±8.34	29.96±8.97
下腿三頭筋囲（cm）	34.33±3.25	35.16±4.45	34.14±2.89

表２　チーズの摂取頻度

	度数（名）	パーセント（%）
殆ど毎日	418	27.6
2 日に 1 回	358	23.7
週 1-2 回	449	29.7
殆ど食べない	287	19.0

表３　摂取しているチーズの種類（複数回答）

種類	パーセント（%）
プロセスチーズ	65.7
フレッシュタイプチーズ	13.1
白カビタイプチーズ	15.3
青カビタイプチーズ	2.5
その他	3.5

表４　チーズの食べ方（複数回答）

食べ方	パーセント(%)
そのまま食べる	68.5
料理に使う	30.3
その他	1.2

表5　チーズ摂取有無によるMMSE得点比較

	MMSE 得点(点)	t-値	有意水準
食べる	28.11±2.16	4.412	P<0.001
食べない	27.24±3.17		

表６ チーズ摂取頻度によるMMSE得点比較

	MMSE 得点(点)	t-値	有意水準
2 日に 1 回以上	28.16±2.08	3.453	P=0.001
1 週間に 1-2 回以下	27.72±2.70		

表７　チーズの種類によるMMSE得点比較

	MMSE 得点(点)	t-値	有意水準
白カビチーズ	28.44±1.84	2.042	P=0.016
他のチーズ	28.05±2.19		

上記の横断的研究から、都市部在住高齢者を対象に横断的に解析した結果であるが、２日に１回以上のチーズ摂取習慣を有する者、白カビチーズ摂取者は認知機能を評価するMMSE得点が高かったことが明らかとなった。

さらに、地域在住高齢女性における乳製品摂取とフレイルとの関連性についても同様に分析した。健診では体格、筋力、歩行速度、聞き取り調査、認知機能（MMSE）のデータを収集した。フレイルはCHS-Jの診断基準５項目（体重減少・疲労・活動量減少・筋力低下・歩行速度低下）を用いて、０ロバスト、１－２点プレフレイル、３点以上フレイルと分類し、１点以上をフレイルと操作的に定義した。さらに、１：１の面接調査よりチーズの摂取有無、摂取頻度、摂取するチーズの種類を調査した。

その結果、フレイルの割合は49.2%（プレフレイル44.3%、フレイル4.9%）であったが、フレイル割合は、チーズ摂取有群、毎日摂取群で有意に低かった。ただし、チーズ種類による差は認められな

かった。チーズの摂取状況とフレイル診断5項目との関連性を検討したところ、チーズ摂取有群で歩行速度低下者の割合が有意に低く（χ^2=6.557、p=0.010）、毎日摂取群で身体活動量減少者が少なく（χ^2=6.822、p=0.009）、カマンベールチーズ摂取群で歩行速度低下者の割合が有意に低かった（χ^2=4.411、p=0.036）。フレイルと関連する要因は、チーズ摂取無（OR=1.607、95％CI=1.1382.271）、血清アルブミン値（OR=0.343、95％CI=0.203－0.578）、転倒有（OR=1.781、95％CI=1.196－2.653）、慢性疾病数（OR=1.249、95％CI=1.141－1.367）、夜間トイレの回数（OR=1.143、95％CI=1.001－1.306）であった。

上記の研究結果から、地域在住高齢女性に対する横断解析の結果であるが、チーズ摂取有無は認知機能およびフレイルと関連する可能性が強く示唆された。今後、大規模縦断研究による追認作業が必要であると思われた。

３．研究業績

【国際講演】（主要なもの）

1）“Community -Based prevention of frailty and dementia among the elderly in Japan” JICA, Special Lecture. Nov., 2021 Tokyo.

【論文】（国際学術誌　主要なもの）

1）Suzuki T, Nishita Y, Jeong S, et al. Are Japanese older adults rejuvenating? Changes in health-related measures among older community dwellers in the last decades. Rejuvenation Research, 24：37－48, 2021

2）Suzuki T, Harada A, Shimada H, Hosoi T, et al. Assessment of eldecalcitol and alendronate effect on postural balance control in agede women with osteoporosis. J Bone Miner Metab, 38； 859－867, 2020.

3）Makisako H, Nishita Y, Jeong S, Suzuki T, et al. Trends in the prevalence of frailty in Japan：pooled analyses from the ILSA-J. J Frailty & Aging. 10；211－218, 2021.

4）Maki Y, Takao M, Hattori H, Suzuki T. Promoting dementia friendly community for improving well-being of individuals with and without dementia. Geriatr Gerontol Int. 2020, 20：511－519.

5）Arai Y, Suzuki T, Jeong S, Inoue Y, Fukuchi M, Ohta H. Effectiveness of Home Care for Fever Treatment in Older People：A Case–control Study Compared with Hospitalized Care, Geriatrics & Gerontology International, 2020.

6）Suzuki T, Kojima N, Kim H et al. The effects of mold-fermented cheese on BDNF in community-dwelling elderly Japanese women with mild cognitive impairment：A randomized controlled, crossover trial. J Am Med Dir Assoc. 2019, 20：1509－1514.

【研究費などの助成金】

１）国立長寿医療研究センター　研究開発費（主任研究員）2,000万円

２）明治株式会社　受託研究費（主任研究員）　500万円

３）厚生労働科学研究費補助金　（分担研究員）　50万円

所 長　中 谷 陽 明

1．研究課題

（1）新カリキュラムに対応した社会福祉士・精神保健福祉士のテキストの作成
（2）地域共生社会実現のためのソーシャルワーカーの有用性の研究
（3）老年学を学ぶテキストの編集・執筆

2．研究活動の概要

（1）新カリキュラムに対応した社会福祉士・精神保健福祉士のテキストの作成

2020年度より着手していた社会福祉士・精神保健福祉士の新カリュキュラムに向けた教科書の作成に、統括編集責任者として携わった。今年度は、全29巻の発刊が実現した。「高齢者福祉」および「ソーシャルワークの理論と方法」の各巻の編集を行い、各巻の一部分の執筆を行った。新カリキュラムは、今年度からの入学生に適用されることになっており、今後本テキストが活用されることを期待している。

（2）地域共生社会実現のための社会福祉士の有用性の研究

地域共生社会の実現を目指した試験的事業が全国において展開されているが、そのような試験的事業におけるソーシャルワーカー（社会福祉士・精神保健福祉士）の有用性を検討する調査を実施し、そのエビデンスの提示を目的とした。これにより、ソーシャルワーカーの専門性を示すエビデンスの一端が見出されることが期待できる。今年度は、地域共生社会の実現を目指した試験的事業（「地域力強化推進事業」あるいは「多機関の協働による包括的支援体制構築事業」）を実施している自治体において、事業に従事しているソーシャルワーカーを対象に聞き取り調査を実施し、次年度以降に実施を予定している質問紙調査で使用する質問項目作成の基礎的データを収集した。

調査研究の方法としては、モデル事業に従事している相談支援包括化推進員を対象に、自記式の質問紙調査を行うことが適当であると判断された。相談支援包括化推進員は、モデル事業に明記された職種の呼称・肩書であり、モデル事業の実施者に調査票を配布することにより、確実に調査票が行き渡ることが期待できる。質問紙調査で、モデル事業におけるソーシャルワーカーの有用性のデータを入手するために、複数の相談支援包括化推進員にインタビューを実施し、それを元に質問項目の検討を行い、32項目の相談支援包括化推進員の業務をたずねる質問項目案を作

成した。次年度以降の調査研究事業においては、今年度の32項目の質問項目案に対する相談支援包括化推進員からのフィードバックを検討することから開始し、修正や変更等を加えた上で、必要であるなら、さらなるフィードバックのためにプリテスト等を実施していく予定である。また、相談支援包括化推進員の業務の実施度と優先度の回答に影響を与えるであろうコントロール変数として、いくつかの要因を検討した結果、相談支援包括化推進員の属性とともに、各モデル事業における相談支援包括化推進員の配置の状況とモデル事業そのものの実施体制についての変数も設定した。これらのコントロール変数についても、さらに検討を重ね必要な修正や変更を加えていくことも予定している。

（3）老年学を学ぶテキストの編集・執筆

老年学学位プログラム担当の６名の教員と協同で、とくに老年学を学ぶ初学者を想定した、老年学を学ぶテキストを刊行した。また、社会福祉に関連する章の執筆を行った。

３．研究業績

【共編著】

１）岡田まり・中谷陽明・中村和彦・渡辺裕一編『ソーシャルワークの理論と方法』中央法規出版、2021

２）須加美明・中谷陽明・結城康博・和気純子編『高齢者福祉』中央法規出版、2021

３）杉澤秀博・長田久雄・渡辺修一郎・中谷陽明編『老年学を学ぶ』桜美林大学出版会、2021

【調査報告書】

１）日本ソーシャルワーク教育学校連盟『新たな社会福祉士養成カリキュラムにおける教員研修のあり方に関する調査研究事業』（厚生労働省生活困窮者就労準備支援事業等補助金社会福祉推進事業報告書）

２）ソーシャルケアサービス研究協議会『福祉三専門職によるソーシャルワークの有効性に関する研究』（令和２年度社会福祉振興・試験センター研究助成事業報告書）

【その他】

１）書評『成年後見の社会学』老年社会科学，42（4），377，2021.

研究員　新　野　直　明

１．研究課題

（１）介護予防に関する研究

（２）老化に関する長期縦断研究

２．研究活動の概要

（１）介護予防に関する研究

東京都立川市の老人ホームにおいて、転倒予防プログラムとして運動・体操教室を継続した。

ダイヤ財団とともに考案したプログラム（ハッピープログラム）を軽度要介護高齢者の精神的健康維持・増進に用いた際の効果を検討する調査・活動を開始した。

転倒に対する検知センサー付きスマホならびにPC管理システム等の開発研究に関して、研究結果をまとめている。

東京都中央区内で、認知症予防活動をも想定した、世代間交流プログラムの企画、運営に参加、協力していたが、今年度はコロナ禍で企画は中断している。

（２）老化に関する長期縦断研究

国立長寿医療研究センターNILS-LSA活用研究室の主催する「脳とこころの健康調査」（老化に関する長期縦断研究の追跡研究）に協力した。

３．研究業績

【著書】

１）老年学を学ぶ（共著）、２章２節、４節３項、５節２項，３項、論創社、東京、2021

【論文】

１）荒川 武士、小林 秋太、佐藤 大地、石田 茂靖、市村 篤士、佐藤 正和、新野 直明：舌骨上筋群の筋活動を効果的に導く頭部挙上方法の検討日摂食嚥下リハ会誌、査読有、25（2）、114－119、2021

２）安 順姫、芳賀 博、新野 直明、森田 彩子、岩田 明子：地域在住高齢者におけるポジティブ心理学的介入を取り入れたうつ予防プログラムの効果、査読有、日本保健福祉学会誌、28（1）、１－13、2021

3）松村 剛志、吉田 英雄、楯 人士、新野 直明：軽症パーキンソン病患者における在宅での自主運動 : 混合研究法による実施状況の把握から意味づけの探索まで
常葉大学保健医療学部紀要、査読有、 12（1）, 29－38, 2021

【学会発表】

1）安 順姫、新野 直明、芳賀 博、岩田 明子：軽度要介護高齢者における精神的健康増進プログラムの試み：デイサービス利用者を対象にして、第16回日本応用老年学会、オンライン開催、2021年11月

研究員　渡　辺　修一郎

1．研究課題

（1）COVID-19予防のための活動自粛が後期高齢者の心身の健康に及ぼした影響

（2）農村部後期高齢者の情報通信機器使用状況と心身機能との関連

2．研究活動の概要

（1）COVID-19 予防のための活動自粛が後期高齢者の心身の健康に及ぼした影響

【目的】COVID-19 予防のための活動自粛が後期高齢者健診受診者の心身の健康に及ぼした影響を明らかにする．

【対象と方法】2019 年 4 月に A 農村の後期高齢者健診を受診した 447 名の内，2020 年 8 月の同健診を受診した男性 90 名，女性 116 名，計 206 名（年齢 80.8±3.9 歳）を対象とした．健診時に，生活状況（世帯形態，受療状況，JST版及び老研式活動能力指標，WHO-5J，外出頻度等）の聞き取り調査を行い，身長，体重，血圧，血液・血液生化学検査等の測定を行った．2020年には，COVID- 19 による生活の変化（活動や外出頻度，お茶飲み回数，おすそわけの授受，仕事での交流等）の項目を追加した．両年の測定値は，正規分布変数は対応のある t 検定，非正規分布変数についてはWilcoxonの符号付順位検定を行った．本研究は，桜美林大学研究倫理委員会の承認（No.17037）を受け，対象に説明し同意を得て実施した．

【結果】継続受診率は 46.1％で地域差（32.1～69.1％）がみられた．2020年のJST版活動能力指標の社会参加得点（－0.3点），老研式活動能力指標の手段的自立得点（－0.3点），体重（－2.1kg），最大血圧（－7.8mmHg），最小血圧（－4.4mmHg），HDLコレステロール（－1.0mg/dL），LDLコレステロール（－12.7mg/dL），血色素量（－0.3g/dL），eGFR（－3.3mL/min），HbA1c（－0.05％）は有意に低下した．COVID-19の予防のための，活動や外出頻度の減少は 52.4％，お茶飲み回数の減少は 66.8％，仕事での交流の減少は 43.9％にみられた．HDLコレステロール，血色素量，JST版活動能力指標の社会参加得点，老研式活動能力指標の社会的役割得点は，いずれも活動や外出頻度が減少した群でのみ有意な低下がみられた．

【結論】健診受診者の約半数が活動を自粛し，一部の健康指標や社会的役割の低下を生じていた．

（2）農村部後期高齢者の情報通信機器使用状況と心身機能との関連

【目的】スマートフォン（スマホ）やパーソナルコンピューター（PC）などの情報通信機器は新型コロナウイルス感染症流行下において社会交流の重要なツールと考えられる．本研究は，農

村部に在住する後期高齢者の情報通信機器使用状況と心身機能との関連を明らかにすることを目的に実施した.

【方法】2021年４月にA村の後期高齢者健康診査対象者1,721人に，性別，年齢，世帯形態，後期高齢者の質問表，JST版活動能力指標，精神的健康状態（WHO-5J），聴力，就業状況，外出頻度，暮らし向き，各種電子機器使用状況等に関する自記式調査票を郵送し，健診受診時に回収した．男性322名，女性392名の受診者の内，男性246名，女性271名より有効回答を得た．各種機器の内，スマホとPCについて，性・年齢区分別使用状況，使用の有無と他の調査項目との関連を検討した．カテゴリー変数間はカイ２乗検定，カテゴリー変数と連続変数間の関連はMann-WhitneyのU検定を用いて有意水準５％にて検定した．また，二項ロジスティック回帰分析にて，スマホおよびPCの使用の関連要因を検討した．本研究は，桜美林大学研究倫理委員会の承認（No.17037）を得て実施した.

【結果】使用者割合は，スマホが，男性31.8％，女性17.9％，75－79歳38.8％，80－84歳17.0％，85歳以上8.9％，PCが，男性20.0％，女性5.8％，75－79歳22.7％，80－84歳5.9％，85歳以上3.6％であり，女性より男性，より若い方が高かった．世帯形態，就業状況，外出頻度，暮らし向きと，スマホ，PCの使用との関連は有意ではなかった．二項ロジスティック回帰分析の結果，スマホの使用には，男性，年齢（低），JST版活動能力指標の新機種利用得点（高），情報収集得点（高），PCの使用には，男性，年齢（低），新機種利用得点（高），電子音の聴取（良）が有意に関連していた.

【考察】スマホやPCなどの情報通信機器利用の促進には情報リテラシーの生涯学習が重要と考えられる．聴力はスマホよりPCの使用の際により重要であると考えられる.

４．研究業績

【著書】

１）杉澤秀博，長田久雄，渡辺修一郎，中谷陽明，編著：桜美林大学叢書　老年学を学ぶ－高齢社会の学際的研究．論創社，東京，2021.

【論文】

１）森下久美，渡辺修一郎，長田久雄：シルバー人材センター会員における屋外作業時の疲労対処行動：運動機能と認知機能の類型による比較．日本公衆衛生雑誌，68（8）：564－571，2021.

２）渡辺修一郎：高齢者の社会参加と健康．Aging & Health，30（3）：10－13，2021.

３）森田泰裕，新井智之，藤田博暁，渡辺修一郎：地域在住高齢者の2年間の基本チェックリストの変化と３年後の新規要介護認定との関連．理学療法科学，36（1）：7－14，2021.

４）森田泰裕，新井智之，渡辺修一郎：地域在住高齢者の基本チェックリストの各領域と3年後の転帰との関連―新規要介護認定と総死亡のリスク要因について―．理学療法科学，36

（4）：553－560，2021.

5）Takao Suzuki, Yukiko Nishita, Seungwon Jeong, Hiroyuki Shimada, Rei Otsuka, Katsunori Kondo, Hunkyung Kim, Yoshinori Fujiwara, Shuichi Awata, Akihiko Kitamura, Shuichi Obuchi, Katsuya Iijima, Noriko Yoshimura, Shuichiro Watanabe, Minoru Yamada, Kenji Toba, Hyuma Makizako: Are Japanese Older Adults Rejuvenating? Changes in Health-Related Measures Among Older Community Dwellers in the Last Decade. REJUVENATION RESEARCH, 24（1）：37－48, 2021.

6）Ryota Sakurai, Saya Watanabe, Hiroki Mori, Tomoya Sagara, Hiroshi Murayama, Shuichiro Watanabe, Kentaro Higashi, Yoshinori Fujiwara: Older assistant workers in intermediate care facilities, and their influence on the physical and mental burden of elderly care staff. BMC Health Services Research, 21, 1285. https://doi.org/10.1186/s12913-021-07302-6, 2021.

7）Masataka Ando, Naoto Kamide, Yoshitaka Shiba, Miki Sakamoto, Haruhiko Sato, Takeshi Murakami, Shuichiro Watanabe: Association Between Physical Function and Neighborhood Environment in Healthy, Older Adults: An Exploratory Study Using Regression Tree Analysis. Gerontology & Geriatric Medicine, 7：1－11, 2021.

【学会発表】

1）渡辺修一郎，鈴木香，馬妮，島影真奈美，田辺生子，井上智代：COVID-19予防のための活動自粛が後期高齢者の心身の健康に及ぼした影響．日本老年社会科学会第63回大会，43（2）：197，2021年６月12日～７月31日／WEB配信.

2）西田裕紀子，牧迫飛雄馬，鄭丞媛，大塚礼，藤原佳典，北村明彦，鈴木宏幸，渡辺修一郎，近藤克則，島田裕之，鈴木隆雄：地域在住高齢者の認知機能の時代的推移－長寿コホートの総合的研究（ILSA-J）より－．日本老年社会科学会第63回大会，43（2）：163，2021年６月12日～７月31日／WEB配信.

3）森下久美，渡辺修一郎，中村桃美，石橋智昭：シルバー人材センター会員における重篤事故の発生状況－2009～2018年度の全国悉皆データによる検討．日本老年社会科学会第63回大会，43（2）：192，2021年６月12日～７月31日／WEB配信.

4）渡辺修一郎，井上智代，田辺生子：農村部後期高齢者の情報通信機器使用状況と心身機能との関連．第80回日本公衆衛生学会総会，2021年12月21日～12月23日，

5）森田泰裕，新井智之，渡辺修一郎：地域在住高齢者における総死亡と２年間の基本チェックリストの悪化との関連．第80回日本公衆衛生学会総会，2021年12月21日～12月23日，

6）渡辺修一郎：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉（高齢者グループ）2020／2021年度活動報告．日本公衆衛生学会拡大公衆衛生モニタリング・レポート委員会，第80回日本公衆衛生学会総会，2021年12月22日，

7）森田泰裕，新井智之，高塚奈津子，渡辺修一郎：地域在住高齢者における３年後の転帰と基本チェックリストの各質問項目の該当の有無との関連－　性別・年齢階層別の検討－．第55回

日本理学療法学術大会，2021年５月29日～５月30日.

８）高塚奈津子，新井智之，森田泰裕，岡持利亘，阿久澤直樹，渡辺修一郎：自主グループ活動に参加した地域高齢者の長期的な身体機能，生活機能の変化．第55回日本理学療法学術大会，2021年５月29日～５月30日.

９）伊藤直子，渡辺修一郎，阿部祐美子，鈴木香，佐々木華香，齋藤崇志，石川歳江：サービス付き高齢者向け住宅利用者の口腔関連機能の現状．第16回日本応用老年学会大会，2021年11月６日～７日.

10）阿部祐美子，渡辺修一郎，伊藤直子：サービス付き高齢者向け住宅入居者の生活満足度に関連する要因－嚥下機能との関連に着目して－．第16回日本応用老年学会大会，2021年11月６日～７日.

11）佐々木華香，渡辺修一郎：フラワーアレンジメントがデイサービスを利用する高齢者の精神的健康状態に及ぼす効果．第16回日本応用老年学会大会，2021年11月７日.

【その他発表】

１）渡辺修一郎：高齢者の社会参加と健康．健康長寿ネット.
https://www.tyojyu.or.jp/net/topics/tokushu/koreisha-shuro-shakaisanka/koreisha-shakaisanka-shuro.html，2021

【科研費などの助成金】

１）2021年度長寿医療研究開発費「長寿コホートの総合的研究（ILSA-J）－２次的データ収集と分析－」（分担研究者）

２）日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B））：シルバー人材センター会員に着目した高年齢就業者の安全・健康管理に向けた要因の解明（分担研究者）

３）日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））：高齢難聴患者の対処行動を支援するための患者・看護師への研修の開発（分担研究者）

４）日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））：地域在住高齢者の口腔機能向上を目指した呼気筋トレーニングプログラムの確立（分担研究者）

５）戦略的情報通信研究開発推進事業（国際標準獲得型）研究開発課題「日-EU共同研究」スマートエイジングを目指す日欧共同仮想コーチングシステム（分担研究者）

【その他の研究活動】

１）東京都健康長寿医療センター研究所，社会参加と地域保健研究チーム協力研究員として，社会参加と地域保健に関する研究に従事.

２）志木市介護保険事業計画策定委員会委員として志木市介護保険事業計画に関する調査研究に従事.

3）公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団客員研究員としてシルバー人材センター会員の就業と健康に関する研究に従事.

4）公益財団法人大原記念労働科学研究所の客員研究員として高齢者の就労と健康に関する研究に従事.

5）世田谷区の健康きたざわプラン推進委員として健康きたざわプランの評価に関する研究に従事.

連携研究員　青　木　宏　心

1．研究課題

（1）社会福祉士および介護福祉士国家試験受験者に対する支援のあり方について

（2）発達障害をもつ児童のソーシャルスキル獲得のための支援について

2．研究活動の概要

（1）介護福祉士国家試験・社会福祉士国家試験　受験対策図書等の執筆

全国社会福祉協議会、中央法規出版、メディックメディアの受験対策図書等を執筆した。

（2）介護福祉士国家試験　受験対策セミナーの講師

静岡福祉大学、横浜市福祉サービス協会の受験対策セミナー講師を務めた。

（3）大学の非常勤講師

田園調布学園大学 非常勤講師として、介護福祉学特講Ⅰを担当した。

3．研究業績

【著書】

1）『社会福祉学習双書2021　第15巻　介護概論』共著、澤田信子、川井太加子、秋山昌江、井上善行、津田理恵子、竹田幸司、横山孝子、澤宣夫、堀口美奈子、木本洋子、鎌田恵子、竹内美幸、青木宏心、池田静香、檜垣昌也、小櫃芳江、西井啓子、八木裕子、木林身江子、全国社会福祉協議会，東京，2021年２月.

2）『クエスチョンバンク　介護福祉士国家試験問題解説2022』共著、青木宏心、赤羽克子、秋山美栄子、新井恵子、飯塚慶子、奥田紀久子、加藤英池子、後藤佳苗、佐伯久美子、佐々木宰、鈴木政史、角田ますみ、竹田幸司、谷口泰司、濱田竜也、林裕栄、松村美枝子、馬淵敦士、南牧生、宮崎伸一、メディックメディア，東京，2021年４月.

3）『介護福祉士国家試験過去問解説集　2021』共著、青木宏心、石岡周平、伊東一郎、井上修一、岩川亮太、大田京子、太田つぐみ、大西典子、大谷佳子、亀島千枝、金美辰、小林哲也、白井孝子、竹田幸司、谷功、千葉安代、中岡勉、長山圭子、能田茂代、馬場千草、東野幸夫、東原由佳、廣瀬圭子、福島岳志、古市孝義、堀米史一、前田美貴、松井康成、宮元預

羽、八城薫、山下喜代美、山田誠峰、山田弥生、渡辺明広、渡邊祐紀、中央法規出版，東京，2021年４月.

４）『介護福祉士国家試験　らくらく暗記マスター2022』共著、青木宏心、佐伯久美子、松崎匡、中央法規出版，東京，2021年６月.

５）『社会福祉士国家試験　らくらく暗記マスター2022』単著、青木宏心、中央法規出版，東京，2021年６月.

６）『介護福祉士国家試験　書いて覚える合格ドリル2022』編著、青木宏心、佐伯久美子、竹田幸司、渡邊祐紀、中央法規出版，東京，2021年５月.

７）『おはよう21』、「介護福祉士国家試験　合格講座2022」単著、中央法規出版,東京，2021年４月号～2022年２月号（全11回連載）

【その他の研究活動】

１）介護福祉士国家試験受験対策講座　講師

①静岡福祉大学：制度系科目【静岡】（2021年10月10日）

②静岡福祉大学：医療系科目、介護系科目【静岡】（2021年10月17日）

③横浜市福祉サービス協会：全科目【神奈川】（2021年10月23日）

④横浜市福祉サービス協会：全科目【神奈川】（2021年10月30日）

⑤静岡福祉大学：全科目【静岡】（2021年12月19日）

２）田園調布学園大学　非常勤講師

①介護福祉学特講Ⅰ【神奈川】（2021年９月～2022年１月）

３）社会的活動

①社会福祉法人仁正会　評議員

②社会福祉法人相模翔優会　第三者委員

③社会福祉法人相模翔優会　選任解任委員

④カンボジア学校法人　KAIGO日本語学院　顧問

連携研究員　浅　野　文　孝

１．研究課題

高齢者の歩行時における状況と心拍数変化の関連

２．研究活動の概要

研究目的：高齢者が街路を歩行する際に心拍数が変化する状況とはどのような状況であるのか，「バリア」と成り得る状況なのか，Global Positioning System（以下GPS）を使用して位置を把握し，その位置の状況を詳細に検証する．

研究の結果：５名の対象者で心拍上昇の位置が多かった区間は「信号のある横断歩道周辺」「坂」「工事建物前」「歩道の狭窄と隣接するところで工事を行っていたところ」であった．主なバリアがないにも関わらず心拍数の上昇がみられた区間があるが，この区間は，車や自転車とのすれ違いが他と比較して多い区間であった．

考察：心拍数が増加する位置がまとまっている場所は物理的なバリアだけでなく，心理的バリアと成り得るものが存在するという可能性が示唆され，心拍数を継続的に記録されたものを検証することで，対象者が置かれていた状況をある程度推察することができると考えられた．

３．研究業績

なし（第64回日本老年医学会学術集会へ演題登録）

連携研究員　有　田　昌　代

１．研究課題

高齢者領域における音楽活動などによるアクティビティケアの可能性と課題

２．研究活動の概要

高齢者対象の音楽や各種アクティビティプログラムは、各種施設や病院、地域、介護予防事業などにおいて、定期的もしくは単発イベント等の枠組みとして幅広く実践されている。担当しているのは各領域の専門家、地域の有償・無償のボランティア、介護職員など様々である。その実践先によるが、高齢者対象の実践に求められる内容は任せられることが多い。また時間経過と共に、対象の高齢者も変化している。改めて音楽や各種プログラムの可能性や課題を探ることを継続中である。

昨年度に引き続きコロナ禍であり、メンタルクリニックのMCI対象者の音楽プログラムや認知症カフェは中止と再開を繰り返した。そのため、外出回数激減による身体的フレイルや他者との交流機会減少による認知機能低下が懸念された。

クリニックと高齢者や周辺関係者との繋がりを意識して、2020年10月から情報共有や情報発信も含めたニュースレター発行は昨年度末の３月で終了した。その後、2021年度は６月に臨時号を発行した。これはクリニックのホームページに載せ、高齢者らには紙ベースで配布した。

また、音楽療法やアクティビティ関係の研修や大会もオンライン開催となった。全国の関係者が画面上で繋がることで、場や時間を共有することができた。対面での実践が困難な場合の興味深い経験である。対面の実践が再開された後も、視点を変え、視野を広げ、具体的な一つの方法としてオンライン活用は効果的な手段だと思われる。

３．研究業績

【その他の活動】

１）総合大学の選択科目「介護予防」で、介護予防における音楽活用の視点での講義を１コマ担当した。音楽の実践を伴うので、コロナ禍においても対面授業が再開されたことは幸いだった。

２）相模原市及び町田市で開催されている「まちさがコンソーシアム」（近隣の大学が参加）の桜美林大学の枠で一般市民向けにオンラインで講義を担当した。桜美林大学の３名の講師の共通テーマは「高齢期の健康と生活の質を考える」であり、筆者のテーマは『音楽とともに

高齢期を豊かに暮らす』～いつまでも笑顔で地域に暮らす～、とした。実践に関してはオンラインでの対応には限界もあったが、40～80歳代の一般市民の参加を得た。集計したアンケート結果を見ると、担当講師らのどの項目も好評であり、一般市民の高齢期の暮らし方への意識や意欲の高さが感じられた。

3）東京都心の有料老人ホームで、能動的参加の音楽活動実践の機会を得た。入居者の年齢や認知機能にはかなりの差が見受けられた。改めて生活の場での音楽プログラムの様々な可能性や限界が示唆された。高齢者用の入居ホームとはいえ、福祉領域とは様々に異なる環境である。経営企業側の考え方、取り組み方が反映される場であることを再認識した。

4）認知症友の会の相談活動及び聴覚障害者関係の２つの研究に共同研究者として参加する機会を得た。前者は来年度も継続する予定であり、後者は論文となる予定である。

連携研究員　池　田　晋　平

１．研究課題

（１）COVID-19の感染拡大における地域在住高齢者のWell-Beingの変化に関する研究

（２）中学生の学習支援を目的とした子ども食堂の効果検証と普及に向けたモデルの構築に関する研究

２．研究活動の概要

（１）COVID-19 の感染拡大における地域在住高齢者の Well-Being の変化に関する研究

神奈川県綾瀬市と共同で，2020年の第１回目の緊急事態宣言と第１波ピーク時期（同年５月初旬）を挟む２時点で調査を実施し（初期調査は2019年12月，追跡調査は2020年７月），幸福感および主観的健康感の変化の実態とその関連要因を縦断的に検討した．その結果，地域活動数の変化，要介護のリスクの変化がWell-Beingに影響している可能性が示唆された．この研究成果は，学術誌に投稿し掲載可の審査を得ている．

（２）中学生の学習支援を目的とした子ども食堂の効果検証と普及に向けたモデルの構築に関する研究

COVID-19の感染拡大を受け，今年度の事業は２回のみの開催に留まったものの，効果検証の指標を検討する目的でステイクホルダーに対するフォーカスグループインタビューを実施した．現在その知見をもとにロジックモデルの手法を用いて成果をまとめている．

３．研究業績

【論文】

１）池田晋平，西村恭介，鈴木武志，佐藤美喜，野尻裕一，芳賀博：地域在住高齢者における余暇的生活行為の実態と社会関係との関連．作業療法40（2）：195－203, 2021.

２）池田晋平，芳賀博：地域在住高齢者の地域活動の参加を促進する社会的要因．作業療法（印刷中）．

３）池田晋平，長谷川裕司，関本繁樹，王建人，平井美佳，芳賀博：COVID-19の感染拡大における地域活動の参加数の変化が地域在住高齢者の幸福感に及ぼす影響．厚生の指標（印刷中）．

【学会発表】

1）COVID-19の流行下における地域在住高齢者の主観的健康感の実態と関連要因（第80回日本公衆衛生学会総会，12月21日～12月23日，東京）

【科研費などの助成金】

1）中学生の学習支援を目的とした子ども食堂の効果検証と普及に向けたモデルの構築（若手研究；2020年４月～2023年３月）

連携研究員　遠　田　恵　子

1．研究課題

（1）高齢者とメディア
（2）高齢者とコミュニケーション
（3）高齢者・障害者と福祉

2．研究活動の概要

（1）高齢者とメディア

高齢者がメディアの中でどのように描かれているのかを検証する。

また、社会的弱者のイメージがクローズアップされがちな高齢者の“自立した姿”を発信するとともに、高齢者向けの生活情報を紹介する。

（2）高齢者とコミュニケーション

高齢者とコミュニケーションを図る時の音声表現などについて研究し、その成果を発信する。

（3）高齢者・障害者と福祉

社会的弱者とされる高齢者・女性・障害者の福祉情報を取材・発信するとともに問題提起や世論喚起をめざす。

3．研究業績

【学会】

1）第16回日本応用老年学会　司会

【番組制作および出演】

1）「ラジオ深夜便」（NHKラジオ第一放送）

高齢者の暮らしにかかわる番組の企画・制作。2016年４月よりレギュラーコーナー「わたし終いの極意」の企画・制作を担当。人生のゴールを迎えるその日までを健やかに暮らすヒントや心構え、終いの極意を聞く。

2021年

４月　女優　柏木由紀子さん

５月　精神科医　保坂隆さん

６月　写真家　大石芳野さん

７月　歌手　小柳ルミ子さん

８月　ドラマスタイリスト　西ゆり子さん

９月　僧侶・歌人　福島泰樹さん

10月　作曲家　吉岡しげ美さん

11月　俳優・歌手・作家　高見のっぽさん

12月　あしなが育英会会長　玉井義臣さん

2022年

１月　東京大学名誉教授　秋山弘子さん

２月　俳優　藤田弓子さん

３月　歌手　綾戸智恵さん

わたし終いの極意傑作選①日本グリーフケア協会会長　宮林幸江さん

②料理研究家　小林まさるさん

③NPエンディングセンター理事長　井上治代さん

そのほか、以下のインタビュー企画・制作

「令和に語る　昭和の暮らし」昭和のくらし博物館館長　小泉和子さん

「右手・右足を失くしても　今がいちばん幸せ」ダンサー　キャロットyoshie.さん

「らじるセレクト　追悼・橋田壽賀子さん」

２）「NHKジャーナル」（NHKラジオ第一放送）

・東京2020オリンピック・パラリンピックに伴い、パラリンピック企画を月一回担当。
注目選手やパラスポーツの魅力を紹介し、パラスポーツや障害者理解を促進した。
「パラ競泳」「視覚障害者柔道」「世代を超えて楽しめるボッチャ」「パラ陸上」「コロナ禍のパラアスリートたち」「東京パラリンピック2020がのこしたもの」など。

・医療健康情報「コロナ禍ですすむ声の衰え～“声筋”を鍛えよう」

３）視覚障害ナビラジオ（NHKラジオ第2放送）

主に視覚に障害のある人に向けた情報番組。企画・制作やスタジオMCを担当。
最新のニュースや役立つ生活情報の発信のほか、さまざまな活動に取り組む当事者を取材。
視覚障害と向き合いつつ、はつらつと生きる高齢者やそのQOLを高める研究開発について取材・制作したものを抜粋記載。

「若者初！“目”になる開発～AIが点訳する機器!」

「タネも仕掛けもある逆転人生　全盲のマジシャン」

「感動をありがとう　東京パラリンピアン」

「鳴らなかった信号機、その後～バリアフリーを実現させた“地域の力”」

「コロナ禍の盲導犬ユーザー～変わる生活様式で直面する入店拒否」

「単独歩行の夢をかなえる新技術」

【その他の研究活動】

1）雑誌「どきどき」特別対談

保坂隆×遠田恵子　「シニアたちよ“孤独力”を身に付けよう！」

2）通販情報誌「えがおで元気」　エッセイ「“華齢”な人々」連載

3）大学で、プレゼンテーションや高齢者とのコミュニケーションに関する講義を実施

桜美林大学「アカデミックプレゼンテーション」「口語表現発展演習」「口語表現Ⅱ」

東京経済大学「日本語表現Ⅰ」「日本語表現Ⅱ」

フェリス女学院大学「放送文化と制度」

長正学園　コミュニケーション論

連携研究員　押　切　康　子

１．研究課題

（１）高齢慢性疾患患者における服薬アドヒアランスに影響する要因に関して社会的認知理論を応用して検討する。

（２）高齢慢性疾患患者の服薬アドヒアランスに関して中高年者と比較することでライフコースが与える影響を検討する。

２．研究活動の概要

（１）地域薬局利用者に対しての質問紙調査を実施

東京都内の慢性疾患にて与薬を受けている地域薬局利用者（40歳以上）に対して自記式質問紙調査を2021年１月４日～２月15日に実施、調査結果を分析中

（２）中高年者と高齢者の慢性疾患患者に対して質的調査を実施

上記、量的調査において調査協力者を募り、服薬に対する困難感、服薬アドヒアランスの獲得時期等をインタビュー調査中

（３）上記内容を投稿すべく論文執筆中

３．研究業績

【学会発表】

１）2021年９月４－５日第39回日本社会薬学会年会において

SP-07　慢性疾患患者の服薬コンプライアンス関連する要因：中年期と高齢期の比較

【論文】

１）研究ノート

「OTC医薬品啓発イベント参加者の医薬品に対する行動とセルフメディケーションの認知・実践との関連性」大部令絵、坂口眞弓、田中雪葉、押切康子、柴田淑子

社会薬学Vol.40 No. 2：2021　113－120

【著書】

１）超簡単!! ポートフォリオ作成ガイド（監修　坂口眞弓　押切康子　小見川香代子）薬事日報社：2021. 1

連携研究員　葛　　輝　子

1．研究課題

（1）高齢外来患者の低栄養に関する調査・研究

（2）産業保健における高年齢者就労支援

2．研究活動の概要

（1）高齢外来患者の低栄養に関する調査・研究

高齢期における健康管理に低栄養の予防は必須である。外来の検査結果である血清アルブミンを中心に評価し、栄養指導を強化する。

（2）産業保健における高年齢者就労支援

産業保健の現場において、高齢労働者における健康課題となる疾病の増加、高齢者に生じる機能低下、高齢者の直面する心理社会的問題があり、その実態と支援方法について情報収集する。

3．研究業績

【研究活動】

1）高齢外来患者の低栄養に関する調査・研究

通院患者の血清アルブミンを中心に、高齢者の健康課題の「見える化」を行うためのデータを収集した。

2）産業保健における高年齢者就労支援

・企業健診における社員295名の健診結果を分析した。各検査値リスク有の割合は、60代以上はメタボ率、血圧、血糖、脂質、腎機能が、他年代と比較して最も高い結果であった。生活習慣では、運動習慣リスク有の割合では60代以上は58.3%、他各年代においては70%を超えた。食習慣リスク有（朝食欠食）の割合は20代が最も高く約半数、年代が上がる程割合は低い結果となった。　企業内中央安全衛生委員会報告　2022.2

・企業内外広報誌コラム執筆

「要となる習慣」　2021.4

「フレイル予備軍」　2021.10

「フレイル予備軍の対策」　2022.2

連携研究員　城　戸　亜希子

１．研究課題

（１）高齢者の社会文化的表象についての研究

（２）小説に描かれた高齢者についての分析

２．研究活動の概要

（**1**）　昨年度に引き続き、小説に描かれた高齢者像の分析を行っている。新聞記事の分析による時代、社会背景を踏まえ、今年度は特に1970年以降に書かれた小説を対象として、老いに関する表現や描写に注目し、社会的高齢者観の変容について考察した。小説に限定せず、映画や漫画も取り上げ、小説における表現との比較分析も行っている。

（**2**）　大学での授業に高齢者が描かれた小説を取り入れ、若い世代の高齢者の老いの心情についての理解を深め、想像力や高齢者とのコミュニケーション向上を図る取り組みを行っている。

３．研究業績

【その他の研究活動】

１）大学で高齢者とのコミュニケーションに関する講義を実施
　高崎商科大学短期大学部　「マナーとホスピタリティ」

連携研究員　久　米　喜代美

１．研究課題

高齢者の介護予防・健康づくりに関する研究

２．研究活動の概要

今年度も世田谷区介護予防・健康づくり自主活動団体助成金交付いただき、区民に向けて高齢者の転倒予防や病気にならないための健康づくりの企画を行い、認知症予防やストレスマネジメントの講義と実践を行った。今後、行う前と後に尺度を使用して改善効果を図る予定である。また、高齢者施設での認知症の調査が、COVID-19の影響で施設への出入りが出来ず中止になり、今後様子をみながら実施予定である。

３．研究業績

【著書】

１）自由時間研究会のメンバーで企画し、研究会での発表を基に各メンバーで執筆した。
仲間づくりワークショップにおける健康の地域活動－スーパーボールとラクロスボールを使用して－地域生涯学習とコミュニティ形成
（株）日本地域社会研究所　P184－P205 2021.10.5

【その他の活動】

１）桜美林大学健康福祉学群精神保健福祉専修のグループ・アプローチの授業を担当
２）世田谷区民会「ストレスケア」講義と実践を担当
３）世田谷区介護予防・健康づくり自主活動団体助成金獲得

連携研究員　小　林　由美子

１．研究課題

高齢期の健康関連の逆境に対するレジリエンス尺度の開発と関連要因の検討

２．研究活動の概要

（１）量的予備調査

【目的と方法】　a.インターネット調査における分析対象者選定法の検討（インターネット調査で生じ易いと言われる望ましくない回答行動の検出）、b.インターネット調査結果の傾向の把握、c.予備的な因子分析、が目的だった。項目の改善に伴い２回実施した。対象者はインターネット調査会社登録の70歳以上の男女100名、男女比は人口構成比を反映させ４：６とした。

【結果と考察】

１）**分析対象者選定の方法**（数値は１回目・２回目の順）望ましくない回答行動を検出する基準はa.正確な回答のお願いへの同意、b.逆転項目と比較した回答矛盾、c.同一番号の回答、だった。１回目はcに４名、２回目はbに１名が該当したため除外し、分析対象者は96名・99名となった。先行研究と比較すると除外件数が少ないため、上記とは違う方法の必要性が示唆された。

２）**回答者の特徴**　**①抽出回による差**（数値は１回目・２回目の順）　年齢を例にとると、平均年齢75.02歳（SD=4.91）・73.65歳（SD=3.50）、年齢範囲は70歳～91歳・70歳～86歳だった。差の検定は行っていないものの、抽出回による標本の特徴の差の存在が示唆された。**②回答者の傾向**（数値は１回目・２回目の順）一人暮らしは14.6%・18.2%、健康状態は、プレフレイル79.2%・63.6%、フレイル12.5%・20.2%、健常12.5%・16.2%、最終学校は高等学校47.9%・45.5%が最も多く、次いで大学34.4%・30.3%、パート・アルバイトを含む有職者は12.5%・22.2%だった。先行の研究や調査と比較すると、プレフレイルの者が多い点でとほぼ同様であるが、教育歴は比較的高かった。**③後期高齢者の特徴**（数値は前期・後期の順）２回目の予備調査では後期高齢者の特徴を前期高齢者と比較した。後期高齢者は前期高齢者よりもレジリエンス平均得点が高かった（111.93点SD15.8・119.53点SD14.75）。健康状態では、プレフレイルの者の割合が前期高齢者より低く（67.2%・56.3%）、逆にフレイル（17.9%・25.0%）と健常（14.9%・18.8%）の両方が前期高齢者よりも高かった。①～③を通して、無作為抽出でないことの影響、及び健康上のエリートが含まれている可能性とそのことがレジリエンス得点の高さに影響している可能性に留意する必要が示唆された。

3）因子構成　天井効果など不適切項目を除外したのち、因子分析を進めた。仮説の構成概念に従った確証的因子分析、不適解の場合はさらに探索的、確証的因子分析を行い、５因子構造（活発化、自然体、人生の目的、関係志向、マネジメントスキル）と6因子構造（再構築という因子を追加）を得た。５因子ではCFI=.958, RMSEA=.048、６因子ではCFI=.971, RMSEA=.033となり、一応の適合度は確保できた。しかしごく一部であるが因子負荷量や相関係数が非有意であった。

（2）認知インタビュー

【目的と方法】項目の認知の様子を検証する認知インタビューを行った。対象者は一般高齢者（機縁法とシルバー人材センターへの依頼８名）と専門職（高齢者総合相談センターの介護支援専門員３名）、調査方法は調査票への記入とコメントの聞き取りだった。調査内容は、a.わかりやすさ・関係性・包括性、b.認知プロセスのどこに問題点が生じたか（問題分類コードスキームCCS使用、以下CCSと記載）、c.左記に関するコメント、の検討だった。

【結果と考察】問題点があった項目数は高齢者34問中23、専門家38問中20だった。問題点をCCSの上位分類で見ると、「理解」が最も多く27件、次いで「記憶の検索」９件、「判断と評価」７件、「回答選択肢」２件、その他６件、合計51件だった。専門家から「活発化に含まれる質問に元々の気質でない起動力を探る質問が見当たらない」「人生の最期に意識を向けるなら最期のイメージについての質問があっても良い」「日頃関わっている要支援高齢者もそうでない元気な高齢者も答えられる内容になっていて良い」というコメントがあった。また「質問の言い回しが気になった」という指摘があったが話し合いの中でほぼ修正することができた。さらに調整を加え項目を決定した。

（3）量的本調査

インターネット調査を400名に実施し、現在分析中である。

連携研究員　柴　﨑　雄　悟

1．研究課題

生活支援コーディネーターによる地域づくりへの取り組み

2．研究活動の概要

生活支援体制整備事業を担う生活支援コーディネーター（以下、SC）による地域づくりの特徴を他の地域づくり関連事業との違いに着目した。対象は、東京23区のSCまたはSCを支援する担当者13名である。質問内容は、他の事業との違いをどのように意識して取り組んでいるかであり、分析は、質的記述的研究で行った。結果は、【住民目線からのニーズ把握】【地域のあらゆる相談を受けとめる窓口となる】【メンバー間の情報共有に努める】【多種多様なメンバー構成】【様々な社会資源を活用して課題解決】【住民の主体的な取り組みが基盤】の６カテゴリーが生成された。以上、SC活動の特徴は、①整備事業が既存の住民の主体的活動を基盤としている、②高齢者を主な対象としつつも全年齢層が抱える問題に対応している、③協議体のメンバー間では問題解決の手段として連携を追求している、ことが示唆された。

3．研究業績

【論文】

1）柴﨑雄悟，杉澤秀博．大都市における生活支援コーディネーターの地域づくりへの取り組みに関する質的研究. 老年学雑誌（掲載確定）

【学会発表】

1）柴﨑雄悟，杉澤秀博．大都市における生活支援コーディネーターの地域づくりへの取り組みに関する質的研究. 第63回日本老年社会科学会ポスター発表

連携研究員　鈴　木　知　明

１．研究課題

（１）高齢者の入浴事故防止
（２）事故になりにくい入浴方法

２．研究活動の概要

（**1**）バスリエ株式会社様との共同で高齢者の入浴実態調査を行う。（高齢者ご本人用とご家族様用）

（**2**）２月４日の「高齢者安全入浴の日」（高齢者入浴アドバイザー協会制定）に、「【入浴事故を減らそう】高齢者のお風呂ってどうすればいい？専門家が疑問に答えます！」YouTube配信。

３．研究業績

【その他の研究活動】

１）伊藤要子博士（ヒートショックプロテイン研究者）から高齢者におけるHSPの最新研究を学ぶ。（2021/10　岐阜）
２）ヘルスツーリズム論（西村典芳教授）の授業の中で、高齢者入浴についての講義を行う。（2021/12　関西国際大学）

連携研究員　関　野　明　子

1．研究課題

介護家族への支援についての研究

2．研究活動の概要

1）別居子による別居介護についてのインタビュー調査

前年度に引き続き、別居介護をおこなっている子ども介護者へのインタビュー調査を実施した。本調査の目的は介護者が別居による介護を継続して行くプロセスと抱く将来展望を明らかにすることである。また2020年より世界的に猛威を振るっているCOVID-19の影響下における介護負担も同時に聴取し、非常事態時における支援のあり方についても同時に検討した。

2）ブックレット「離れて暮らす親の介護」の作成

上記インタビュー調査に基づき、A5版のブックレットを作成した。別居介護について多くの方に知って頂くとともに、別居介護の当事者の方には、別居介護を続けていくためのヒントや、同じような状況下の方のエピソード、また支援者方には別居介護支援のヒントをお伝えすることをねらいとしている。2022年度より地域包括支援センターをはじめとする行政窓口数か所にて配布する予定である。

3．研究業績

【学会発表】

1）関野明子・涌井智子、別居介護継続のプロセスと将来展望－高齢の親を別居で支える子ども介護者へのインタビュー調査から－，日本老年社会科学会第63回大会，2021.6.12－27 WEB配信

【科研費などの助成金】

1）勇美記念財団　一般公募「在宅医療研究への助成」（研究代表者）

連携研究員　孫　　潔

1．研究課題

（1）高齢者における主観的な学習ニーズと実践に関する研究：測定指標の開発と関連要因の解明
（2）認知症の患者におけるコミュニケーション障害評価

2．研究活動の概要

（1）高齢者における主観的な学習ニーズと実践に関する研究：測定指標の開発と関連要因の解明

研究の背景

高齢期における学習活動は高齢者と社会にとって次のような意義があると指摘されている．①学習を通じて地域が抱える課題解決の担い手として活躍できる，②学習を通じて社会とのつながりを持ち，社会からの孤立を防止できる，③学習を通じた生きがいの創出により，第二の人生に潤いができる，④学習を通じた健康を守り，生活の質が向上できる．このような意義のある学習活動を高齢者の間に普及するため，欧米及び中国と台湾などの国や地域は，高齢者教育・学習を推進している．日本では，これまで高齢者における学習への支援・推進は，「生涯学習の環境の整備」「学習情報提供」「学習機会拡充」を柱に進められてきている．しかし，生涯学習に関する世論調査（2018年に実施）の結果では約７割の高齢者は学習意欲があるものの，学習をしたことがある人は約５割しかいないということが明らかにされている．欧米と中国においても，高齢者における主観的な学習ニーズと実践の間にギャップが存在することが指摘されている． 高齢者の主観的な学習ニーズの喚起とともに，このようなニーズと実践のギャップを解消するためには，高齢者の間における主観的な学習ニーズと実践活動を正確に評価するとともに，ニーズと実践活動の関連要因を解明することが求められる．

本研究の目的

第１の目的は，学習領域別に高齢者における主観的な学習ニーズと学習実践の評価指標をそれぞれ作成すること，第２の目的は，作成した評価指標を利用し，高齢者の主観的な学習ニーズと実践のギャップの大きさを学習領域別に明らかにすること，第３の目的は，作成した評価指標を用いて，高齢者における主観的な学習ニーズの出現およびその実践への移行に関連する要因を明らかにすることである．

以上の３つの課題の関連は次の通りである．本研究の実践課題は，学習ニーズと実践とのギャップの克服にある．そのためには，ニーズと実践とのギャップが生じる要因，すなわち学習ニーズの出現とその実践への移行に関連する要因を解明する必要がある．しかし，その前提とし

ては，ギャップの存在をきちんと明らかにすることが必要となるが，学習ニーズと実践を評価する指標が開発されていない．以上のような制約の中で，本研究では，第１ステップとして，妥当性と信頼性が確保された主観的な学習ニーズと実践の評価指標を開発した．次いで第２ステップとして，開発した指標を活用し，学習ニーズと実践とのギャップを明らかにした．最後に第３ステップとして，ニーズと実践とのギャップが生じる要因，すなわち学習ニーズの出現とその実践への移行に関連する要因を解明した．

研究構成

Ⅰ　高齢者の主観的な学習ニーズ・実践の評価に関する研究

北千葉地域住民を対象として，共通する項目を用いて高齢者における主観的な学習ニーズを「必要性の認識」と「興味」の側面から評価するとともに，それに対応する学習経験の評価指標も作成した．それぞれ評価指標は，「一般的学問」「高齢者における日常生活の課題」「ICT技能」「人生の振り返り」という４次元が抽出された．

Ⅱ　高齢者における主観的な学習ニーズと実践とのギャップ

まず東京都下の町田市に在住の60歳以上の住民から無作為に抽出した516名を対象として．無記名の自記式調査票を用い，郵送法によって行った．調査票の配布は2020年1から２月まで行った．回収された調査票は273であった．桜美林大学の研究倫理員会の承認を得た．

高齢者における主観的な学習ニーズと実践とのギャップについて，「高齢期における日常生活の課題」の次元のニーズが主観的な学習ニーズの平均よりも有意に高かった．「ICT技能」「一般的学問」「人生の振り返り」という次元は，いずれも主観的な学習ニーズの全体平均より有意に低かった．

Ⅲ　高齢者における主観的な学習ニーズの出現とその実践への移行に関連する要因

対象と調査方法と倫理的配慮は「高齢者における主観的な学習ニーズと実践とのギャップ」に共通した．

健康行動変容理論を踏まえ，高齢者における主観的学習ニーズの自覚の関連要因の結果では，老後に向けての準備への努力している高齢者，学習効果への認知が高い高齢者で，主観的な学習ニーズの出現が有意に高かった．

ニーズの出現から実践への移行に関連する要因の分析結果を示した．家族・友人が高齢者の学習に対して好意的・支援的であることが有意な効果を持っていた．

総合考察

Ⅰ　主観的な学習ニーズ・実践の評価指標の活用

まず，従来学習プログラムの設定の視点からみると，本研究では，学習活動を実施していない高齢者をも対象として高齢者の主観的な学習ニーズの評価指標を開発するとともに，それと対と

なる学習実践の評価指標をも併せて開発した．本研究で開発した指標を用いることで，高齢者における主観的な学習ニーズと学習実践とのギャップを明確に把握することができることから，高齢者の学習を推進することの一助になると思われる．

Ⅱ　高齢者の主観的な学習ニーズの合致した教育内容の提供

高齢者の主観的な学習ニーズについては，「高齢期における日常生活の課題」という次元の学習ニーズが最も多く，実践とのギャップが大きい次元も，この次元であることが明らかにされた．「人生の振り返り」の課題については，他の次元と比較して学習ニーズは高くないものの，実践とのギャップが大きかった．前期高齢者と後期高齢者との比較でも，「ICT技能」の次元を除き，この傾向に違いがなかった．今後，高齢者に向けた学習プログラムは，後期高齢者も含め，従来の「教養」系に加えて高齢期における学習ニーズに合致する「高齢期における日常生活の課題」や「人生の振り返り」を位置付けることが必要である．

Ⅲ　高齢者における学習の促進策

高齢者の学習に関する研究領域においては，主観的な学習ニーズの喚起から実践までを視野に納めつつも，それぞれを変容ステージに区分し，それぞれのステージごとに介入の在り方が異なることを指摘した研究はほとんどない．分析の結果，主観的な学習ニーズがない状態からニーズの出現へのステージ変容の段階には，老後に向けての準備への努力，学習効果への認知が関連していること，ニーズの出現から実践へのステージ変容の段階には，家族・友人が高齢者の学習に対して好意的・支援的であることが関連していることが明らかにされた．すなわち，主観的な学習ニーズがない状態からニーズの出現，ニーズの出現から実践という２つのステージの区分ではあるが，それぞれの段階への変容には介入方法を異にすることが必要であることが示唆された．

主観的な学習ニーズがない状態からニーズが出現するように変容させるには，老後生活準備に取り組む，すなわち，想定される老後の問題とその解決のために何が必要かを考える機会を提供することが重要である．台湾では，中高年を対象として老後の生活設計を立てるように奨励している．日本でも台湾と同じように老後の生活設計を立てるように促すことが主観的な学習ニーズの喚起につながる可能性が示唆された．同時に，本研究の結果から，学習活動の効果について理解が進むような機会を高齢者に提供することもニーズの出現に有効であることが示唆された．中国・台湾においては，高齢者の学習活動を促すために本人のみならず周りの家族と友人に対しても学習のメリットに関する情報を積極的に伝えることを提唱している．日本においても，このような施策が重要であることが示唆された．

さらに，日本では，高齢者の学習への支援は，「生涯学習の環境の整備」「学習情報の提供」「学習機会の拡充」を柱に進められてきている．「生涯学習の環境の整備」については，高齢者が利用しやすいように施設のバリアーフリーなどへの取り組みが行われてきた．「学習情報の提供」については，広報紙の発行とともに，公共施設をはじめとして，駅，スーパーマーケット，商店街などでポスターの掲示やチラシの配布をしてきた．各市町村の生涯学習センターにおいて

学習相談窓口も開設されてきた．「学習機会の拡充」については，高齢者大学の設立，NPO団体，図書館，市民大学などの連携による教育ネットワークの構築が行われてきた．さらに様々な学習プログラムも開発されてきている．最近では，ICT技術を活用してオンライン学習も進められている．しかし，それぞれの施策が高齢者の現実の学習活動にどの程度有効であるかほとんど検討がなされていない．本研究では，「生涯学習の環境の整備」については，学習環境充実度という指標を用いて，その効果を見てみた．分析の結果，学習環境充実度が学習ニーズの喚起，ニーズから学習実践への移行のいずれにも有意な影響はみられなかった．「学習情報の提供」については，家族や友人という高齢者の身近なネットワークがニーズの出現後の学習実践への移行に有意な効果があることが示された．以上のことから，高齢者の間に学習ニーズを喚起し，学習実践を活発化されていくには，以下のような取り組みが必要であることが明らかにされた．①学習参加者による学習プログラムの企画および参加者のインフォーマルなネットワークを活用した参加の呼びかけ，②若い世代も含めた全世代型の共学ができるようなプログラムの構築.

（2）認知症の患者におけるコミュニケーション障害評価

高齢化が最も進んでいる国のひとつである日本は，近年認知症の患者が増加し、高齢患者の割合が高い．1980年代以降、日本は認知症コミュニケーション障害の効果的な評価方法を模索し、対応策を策定しており，これまでのところ，日本は認知症コミュニケーション障害の評価、診断、治療の先進国になった．本研究では，日本における認知症患者に向けて談話・会話分析，認知症患者のコミュニケーション障害の型別評価、臨床診断の総合評価の応用とその効果を分析し，それぞれの研究成果は、中国の認知症患者の介護サービスにおけるコミュニケーションの支障という問題を解決するため参考になると期待されている.

３．研究業績

【著書】

1）「認知症の患者におけるコミュニケーション障害評価」という一文は，『高齢者言語学新発見』（顧曰国，黄立鶴，他編）に収録され，同済大学出版社（出版予定）.

【論文】査読付き

1）孫潔，杉澤秀博．2022．高齢者における主観的な学習ニーズと実践に関する研究：関連要因の解明．応用老年学，Vol16．掲載予定.

2）孫潔，杉澤秀博．2021．高齢者における主観的な学習ニーズ及び学習経験に関する評価指標の作成．応用老年学，Vol15．58－67.

【学会発表】

1）孫潔，杉澤秀博．高齢者における学習に対する「興味」の関連要因．日本老年社会科学会第64 回大会．東京．2022.7．（予定）

2）孫潔，杉澤秀博．高齢者の学習実践に対する老後に向けての準備行動の直接的・間接的影響．第16回日本応用老年学会大会．東京．2021.11.

3）孫潔，杉澤秀博．高齢者における主観的な学習ニーズと実践とのギャップ．日本老年社会科学会第 63 回大会．東京．2021.6．

【その他の研究活動】

1）慶応義塾大学 2040 独立自尊プロジェクトに参加.

連携研究員　東　方　和　子

１．研究課題

介護予防・地域支えあい事業アクテイビテイ・ケアプログラムに関する研究

２．研究活動の概要

１）神奈川県A市にあるBグループホームにてアクテイビテイ・プログラムの企画と実施に携わる予定であったが施設への出入りが出来ず今年度も活動できなかった。

２）東京都B市にある総合福祉センターを活動場所として展開されている高齢者の自主運営による英会話グループの講師としてプログラムに参加し、高齢者による自主運営プログラムの実施状況を観察しその展望を探る。

連携研究員　徳　田　直　子

１．研究課題

女性定年退職者の生活と考え方

２．研究活動の概要

＜情報収集＞

女性定年退職者は総合職世代の引退、70歳以上までの雇用などで調査報告、文献など情報もふえている

１）所属関連団体からの情報収集

老年社会科学会、日本応用老年学会、高齢社会をよくする女性の会、シニア社会学会、シニアわーくすRyoma21

定年女子実行委員会 フォーラム参加

２）既存関連調査（官庁、民間）の情報収集

３）杉澤ゼミ聴講（zoom）

連携研究員　殿　原　慶　三

1．研究課題

（1）高齢者がレクリエーションダンスを行なう効果
（2）台湾原住民における高齢者の位置づけと役割

2．研究活動の概要

（1）高齢者がレクリエーションダンスを行なう効果

コロナ感染予防のため、集合活動の自粛・施設の閉鎖などがあり、従来の開催方法は不可となった。そこで、対象の団体を絞って経過を追った。現在、①マスク使用とアルコール消毒により従来通りの活動、②オンライン利用による活動、③活動内容を変更して勉強会実施、④集合の案内を出すが、コロナ感染者増大により中止することが多い、などの特徴があり、団体により取り組み方法の工夫や変化が見られた。危機対応と組織存続いう観点から興味深いと考えられた。

（2）台湾原住民における高齢者の位置づけと役割

フィールドワークを計画していたが、台湾への入国ができないため台湾文化センターでの隔週開催の台湾原住民舞踊講座に参加し、阿美族の言語などについて情報収集を行なった。参加者の半数は台湾出身者であった。一方現地へのヒアリングにより、ゼロコロナ政策の成功にともない、2021年度は例年通りに豊年祭、年祭が実施されていたことが分かった。

3．研究業績

【その他の研究活動】

1）地域の老活セミナーに参加（10～12月）
2）高齢者向け福祉施設の活動に週３回参加（10月～現在、多摩ニュータウン）

連携研究員　友　永　美　帆

1．研究課題

社会的孤立の高齢者に対する「聞き書き」による自分史作成と地域交流拠点への参加による支援に関する研究

2．研究活動の概要

社会的に孤立した高齢者に対する「聞き書き」による自分史の作成と地域交流拠点への参加による支援の有効性を評価することを目的とした．有効性は，量的及び質的に分析した結果により評価した．分析対象は４例であった．量的分析の指標には，生活満足度，うつ症状，自尊感情，社会的ネットワーク指標を用い，支援前，支援６か月後と１年後に測定した．質的分析は，支援過程における分析対象の発言・観察データに対する質的記述的分析を用いた．

量的分析の結果では，統計的に有意な結果は得られなかったものの，効果が認められたのは，社会的ネットワーク指標であった．質的分析の結果では，「聞き書き」による自分史については．当初【自分史を語ることへの躊躇】がみられたものの，聞き書きを進める中で【自分史に対する肯定的な態度への転換】が起こり，結果として【積極思考への変化】が起こったこと，地域交流拠点への参加については，【参加者同士の接点を探る】さらに【重なる部分が会話を盛りあげる】を経て参加者同士の心理的距離が近くなるということが観察された．

3．研究業績

【論文】

1）友永美帆，野村知子，杉澤秀博．2022．社会的孤立の高齢者に対する「聞き書き」による自分史作成と地域交流拠点への参加による支援の有効性．老年学雑誌（掲載確定）

連携研究員　萩　原　眞由美

１．研究課題

（１）デスカフェ参加による死生観の変化とACP実践の準備性

（２）企業活動における老年学の応用に関する啓発・普及

２．研究活動の概要

（１）デスカフェ参加による死生観の変化と ACP 実践の準備性

高齢者本人の「人生会議（ACP）」実践へのモチベーションを生み、家族など周囲からは言い出しにくいという課題解決の端緒にもなり得る＜ACP準備教育としてのデスカフェの機能＞を探ることを目的に、デスカフェに複数回参加している者24人を対象に、若年（20～30代）、中年（40～50代）、高年（60代以上）をほぼ均等になるように４つのグループに分け、オンラインによるフォーカス・グループ・インタビューを実施した。得られた質的データより、デスカフェ参加前と現在までの死生観の変化、およびACPに関する情報収集や体験と意識の変化を分析中。

（２）企業活動における老年学の応用に関する啓発・普及

老年学の基礎知識を企業活動に生かすことを目的に、老年学を学んだことのある人が企業の中に増えるための方策として、「ジェロントロジー検定試験」及び、企業内研修としての「ジェロントロジー入門講座」の実施に努め、老年学の学びから高齢社会マーケットに生じる変化の有無を実証できるまで、その土壌づくりを促進中。

３．研究業績

【著書】

１）『デスカフェ・ガイド～「場」と「人」と「可能性」～』吉川直人・萩原真由美（共著）、クオリティケア、2021年５月

【科研費などの助成金】

１）公益財団法人 上廣倫理財団令和３年度研究助成（一般公募）
「デスカフェ参加による死生観の変化とACP実践の準備性」代表者：萩原眞由美

【その他の研究活動】

１）女子栄養大学栄養学部・実践１年の科目「公衆衛生学Ｉ」

2021年12月13日（実践AB）１限にて「エンド・オブ・ライフとデスカフェ」を講義

2021年12月17日（実践CD）１限にて「エンド・オブ・ライフとデスカフェ」を講義

２）実施運営サポート「桜美林学園ジェロントロジー入門講座」

2021年７月６日（火）～７日（水）㈱ＰＣデポコーポレーション社員36名の研修準備＆当日実施を支援

３）企画運営：住まいと住まい方のジェロントロジー研究会、オンライン

公益財団法人トラスト未来フォーラム主催，慶応義塾大学理工学部教授（建築学）を座長に、三井住友信託銀行・日本応用老年学会・竹中工務店ほかによる産学連携研究会の継続。幸福な高齢期を過ごすための住まいと住まい方の検討を目的とする。

・第９回2021年４月23日～第13回2020年12月16日（月１回開催で継続中）

４）企画運営・話題提供：みんなの老年学研究会

・公開講座「終末期に寄り添う看護師が語る死の授業」2021年８月８日

・第21回　拡大研究会「生涯現役ハウスの取り組みに注目！」2021年９月18日

連携研究員　橋　本　由美子

１．研究課題

（１）独居高齢者の配偶関係からみた類型が高次生活機能および精神的健康状態に及ぼす影響
（２）認知症高齢者のQOLと環境との関連

２．研究活動の概要

（１）独居高齢者の配偶関係からみた類型と精神的健康状態および社会的役割との関連

独居高齢者の健康に関する検討に関与した。

（２）認知症高齢者の QOL と環境との関連

ユニット型特養の入所者のより良いケアに影響のある、環境アセスメントツールの日本語訳に関わった。

３．研究業績

【論文】

１）Japanese Translation and Validation of the Environmental Assessment Tool–Higher Care Sumiyo Brennan, PhD, Therese Doan, RN, PhD, Kirsty Bennett, FRAIA, Yumiko Hashimoto, PhD, and Richard Fleming, PhD Health Environments Research & Design Journal 2021, Vol. 14（4）：75－92

【その他】

１）専門学校における，１学年（昼間部・夜間部）科目：栄養指導および３学年（昼間部・夜間部）国家試験対策において，老年学分野を含む講義を行った.
特に高齢期における栄養指導について：
・高齢者の身体の変化（嚥下機能低下，味覚細胞の減少など）
・介護食品（スマイルケア食など）
・フレイル（低栄養と予防など）
2021年前期，後期

連携研究員　平　林　規　好

１．研究課題

（１）高齢者のＱＯＬと社会貢献の向上に資する公共政策
（２）活力ある高齢社会構築に資する公共政策
（３）大衆長寿社会における老年学知見の普及、啓発

２．研究活動の概要

（１）高齢者のＱＯＬと社会貢献の向上に資する公共政策

産学公民連携によるフィジビリティ・スタディの推進

（２）活力ある高齢社会構築に資する公共政策

ＱＯＡ概念の普及・実装（Quality of Aging/健康長寿座標二次元モデル）
「地域公益活動団体（自治会、ＮＰＯなど）」、地方自治体との新・連携の推進

（３）大衆長寿社会における老年学知見の普及、啓発

キャンパス・コミュニティ/日本型ＣＣＲＣプログラムの研究
高・大連携によるエイジング論共通科目化推進、死生観概論
集合住宅「二つの老い問題」方策

３．研究業績

【公共政策プロジェクト】

１）認知症カフェ運営/プログラム・オフィサー（館山市）
２）集合住宅「二つの老い問題」方策プログラム（マンション管理士団体）
３）茅ヶ崎市国民健康保険運営協議会委員/非常勤特別職

【主な講演、講義】

１）老年学入門、死生観概論（地域包括支援センターなど）
２）公共哲学としての死生観概論（高齢者福祉施設職員研修）

連携研究員　藤　井　　顕

１．研究課題

後期高齢者における椅子立ち上がりテストと生活動作との関係

２．研究活動の概要

修士論文では、後期高齢者の10秒椅子立ち上がりテストと大腿四頭筋筋力との関係について、椅子立ち上がりテストの計測値と筋力との関連を検討してきたが、生活動作との結びつきについて検討していく必要性を感じており、椅子からの立ち上がりテストを用い、後期高齢者を対象とした調査を継続して行く。

３．研究業績

【その他の研究活動】

１）千葉県理学療法士会学術局主催研修会の企画運営
２）千葉県理学療法士会学会運営協力
３）「理学療法士講習会」臨床を豊かにする理学療法研究の基本への協力
４）千葉県理学療法士会地域包括ケアシステム推進リーダー研修会運営協力
５）「専門リハビリテーション研究会誌」編集協力
６）専門リハビリテーション研究会教育研究部会企画運営

連携研究員　ブラナン　純代

１．研究課題

（１）ユニット型特別養護老人ホームの施設環境と認知症利用者の生活の質に関する研究

（２）豪州の認知症対応型小規模施設環境尺度，Environmental Assessment of Tool-High Care（EAT-HC）の諸言語研究チーム員

２．研究活動の概要

１）日本版 Environmental Assessment of Tool-High Care （J-EAT） の作成

ユニット型特別養護老人ホームの入所者の生活の質を高めるための環境支援尺度として，J-EATを作成中

２）EAT-HCの諸言語版作成者らとの共同研究

ドイツ，シンガポールのEAT-HC 研究者らとcross-cultural adaptation の共同研究：論文の共同執筆および学会発表準備

３．研究業績

【論文】

１）博士論文

「ユニット型特別養護老人ホームの施設環境が入所者の生活の質に及ぼす影響

－Environmental Assessment Tool-High Careを用いた検討－」

（2021年３月15日　博甲第99号　取得）

２）Brennan S. & Doan, T. （2022）. Small-scale living environments' impact on positive behaviors and quality of life for residents with dementia. Journal of Aging and Environment. Published online January 31, 2022. doi：10. 1080/26892618. 2020. 2030845

３）Brennan S., Doan, T., Bennett, K., Hashimoto Y., & Fleming, R. （2021）. Japanese translation and validation of the environmental assessment. Health Environments Research & Design Journal, 14（4）, 75－92.

【学会発表】

1）Anne Fahsold, Sumiyo Brennan, Therese Doan & Joanna Sun. Comparison of content validity of the Environmental Assessment Tool－Higher Care（EAT-HC）：Lessons learned from Germany, Japan, and Singapore. The 6th edition of the Nursing Home Research International Conference, June 2－4, 2022, Toulouse, France（Accepted）.

【その他の研究活動】

1）特別講師

講演「認知症にやさしい施設環境」

2021年５月15日　パーソン・センタード・ケアを考える会

2021年12月18日　医療法人水の木会下関病院認知症疾患医療センター

2）Residential Care for the Elderly Administrator Certification（カリフォルニア州高齢者福祉施設管理者免許）維持にあたり，高齢者介護施設の運営（法律，POLST）および認知症ケア（パーソン・センタード・ケア，BPSD，薬物管理，LGBT，余暇活動，終末期医療，虐待，救急応答等）について20時間の講習に参加.

連携研究員　堀　内　裕　子

１．研究課題

（１）シニアマーケット研究

（２）高齢者の安全・安心に関する研究

２．研究活動の概要

（１）シニアマーケット研究

・シニアマーケット関連の調査、設計、実施、報告

・高齢者をメインターゲットとする商品・サービスに関する市場調査、及び企画一式（調査設計・実査・分析・報告等）

・高齢者の行動調査の設計、実施、分析、等

・高齢者施設における実証研究

（２）高齢者の安全・安心に関する研究

・警察政策学会・日本市民安全学会での研究会に参加

・日本市民安全学会　毎月行われる研究会に参加

・市町村・企業・学会等、依頼講演による啓蒙活動等

３．研究業績

【著書】

１）人生100年時代を楽しむ生き方（インタビュー録）

シニアのモラトリアムに注目、大義名分と素直さで再チャレンジを，労務行政，2021年８月

２）With・Afterコロナで生まれた新しい潜在・将来ニーズの発掘と新製品開発への応用；第三節 With・Afterコロナとシニアマーケット（シニアの引き算消費が加速する），技術情報協会，2022年２月

３）堀内裕子，（連載）発見「いいもの・いいこと」見つけてきました

TECHNOプラス 福祉介護　日本工業出版社

№135　４月号　「孤独と孤立」Ⅰ

№136　５月号　「孤独と孤立」Ⅱ

№137　６月号　「新たな２０２５年問題」Ⅰ

№138　７月号　「新たな２０５０年問題」Ⅱ

№139　８月号　「地域のちから「浜CHAN」」Ⅰ

№140　９月号　「地域のちから「浜CHAN」」Ⅱ

№141　10月号　「高齢者のご近所付き合い」

№142　11月号　「高齢者のコロナ禍の活動」

№143　12月号　「毎年恒例「過去最高」の高齢化率・高齢者人口」

№144　１月号　「新しい力が地域の介護を変える」（うらそえ福祉会）Ⅰ

№145　２月号　「新しい力が地域の介護を変える」（うらそえ福祉会）Ⅱ

№146　３月号　「新しい力が地域の介護を変える」（うらそえ福祉会）Ⅲ

【論文】

１）堀内裕子，森本栄一，ヘルスケアビジネスのカギを握る高齢者と今後の展開，健康政策とヘルスケアビジネスの展開～グローバルビジネス学会2020年度研究発表会企画セッションより～，文教大学経営学部，経営論集Vol.７，

【その他の研究活動】

１）講義・講演他

①2021年３月　麻生区役所　危機管理担当「安全・まちづくり協議会」振り込め詐欺防止研修会「老年学から考える振り込め詐欺防止」

②2021年４月Oriental Life Insurance Cultural Development Center online seminar 「What is senior marketing from the perspective of gerontology?」

③2021年７月　立教大学セカンドステージ
「老年学視点からのシニアマーケット分析」

④2021年８月　三井住友銀行オンラインセミナー
SMBCエルダープログラム「人生100年時代の長寿人生をサポート」

⑤2022年１月　三越伊勢丹グループ　オンラインセミナー
ニューノーマル時代の新シニアマーケティング
～超高齢社会の消費行動を捉えたリアルイベント成功事例～

⑥2022年１～２月　三井住友銀行オンラインセミナー
「人生100年時代FORUM」

連携研究員　牧　野　公美子

1．研究課題

（1）認知症高齢者の終末期医療・ケアを代理意思決定する家族への看護支援

（2）患者中心の臨床試験の実現に向けた臨床研究コーディネーターと臨床看護師の協働

2．研究活動の概要

（1）認知症高齢者の終末期医療・ケアを代理意思決定する家族への看護支援

本研究の目的は、介護老人福祉施設の看護師が行った家族への代理意思決定支援のプロセスを満足のいく代理意思決定ができたと回顧的に評価した認知症高齢者の家族の場合について明らかにすることであった。質的データは、主に支援した看護師を調査対象とした面接調査の逐語録である。M-GTAを用いて分析した結果、当該看護師らは、実際に代理意思決定が行われる時期だけではなく、高齢者の状態安定時から代理意思決定を見据えて家族と関わり、施設内看取りが決断された後は高齢者に対する緩和ケアに尽力するとともに、代理決定者の精神的負担の軽減に努めていたことが明らかとなった。研究結果は、老年学雑誌に掲載が確定している。

（2）患者中心の臨床試験の実現に向けた臨床研究コーディネーターと臨床看護師の協働

本研究は、臨床研究看護に関する日本における研究動向と課題の整理【課題Ⅰ】、臨床試験に参加する患者からみた看護への評価とニーズ【課題Ⅱ】、看護師CRCと臨床看護師の協働における促進・阻害要因【課題Ⅲ】の解明を通じて、患者中心の臨床試験を実現するうえでの看護師CRCと臨床看護師の協働のあり方について検討・提言する。

1）日本における臨床研究看護についての文献研究

国内発表文献の分析結果を、学会においてポスター発表および誌上発表した。

2）臨床試験参加患者が求める支援の具体化を目指す質的研究

DIPEx-Japanが管理・運営している「語りのアーカイブ」に収録されている参加患者らの「臨床試験・治験の語り」データの二次分析を進めた。

３．研究業績

【論文】

１）牧野公美子，杉澤秀博，白柳聡美：満足のいく施設内看取りの決断ができた家族に対して看護師が行っていた代理意思決定支援，老年学雑誌，12，2022（査読有）［掲載確定］.

【学会発表】

１）牧野公美子，五十公野由起子，秋元美佐枝，牧田美佳，佐藤直美：被験者らの視点から臨床研究看護のあり方を探る国内研究の動向と概要，日本臨床試験学会第13回学術集会総会（2022年２月４－５日），東京.

２）秋元美佐枝，牧田美佳，牧野公美子，五十公野由起子，佐藤直美：臨床看護師及びCRCを調査対象とした臨床試験に関する国内研究の動向と概要，日本看護研究学会第26回東海地方会学術集会（2022年３月５日），誌上発表.

３）鈴木千恵子，小田切圭一，牧野公美子，大村知広，木山由美，坪田裕美，乾直輝，梅村和夫，渡邉裕司：特定臨床研究における「臨床研究保険」加入状況調査，第42回日本臨床薬理学会学術総会（2021年12月９－11日），仙台.

【科研費などの助成金】

１）国立研究開発法人日本医療研究開発機構「令和３年度研究開発推進ネットワーク事業」：治験及び臨床研究におけるQuality by Designの相違調査と求められる体制整備統一方法論の確立（分担研究者）

【その他の研究活動】

１）日本老年看護学会令和３年度研究論文奨励賞を受賞

連携研究員　松　井　康　祐

１．研究課題

高齢者のICTリテラシーと健康習慣に関する研究

２．研究活動の概要

本研究は、①高齢者におけるICTリテラシーの健康習慣への影響を明らかにすること、②ICTリテラシーの問題点、とりわけ情報格差を検討し、高齢者のHLの向上の促進を社会的要因・心理的要因の面から解明することを目的としている。そのため、各分野における視野を広げた知見と先行研究の情報収集を中心に行っている。

１）先行研究の情報収集

所属学会の日本人間工学会、日本官能評価学会等の研究とWeb上の検索結果を閲覧し、先行研究の情報収集を行っている。

２）学会発表

松井康祐，杉澤秀博．高齢者の健康習慣におけるヘルスリテラシーの効果に関する研究．日本老年社会科学会第64回大会「老年学における学際的な研究・実践・教育の推進」．桜美林大学新宿キャンパス．2022.7.2－7.3（一般報告予定）

３．研究業績

【論文】査読付き

１）松井康祐，杉澤秀博．2022．高齢者の健康習慣におけるヘルスリテラシーの効果に関する研究．老年学雑誌，12，32－45.

連携研究員　松　永　博　子

１．研究課題

（１）中年期の人のSuccessful Agingに関する研究
（２）高齢者の就労支援に関する研究
（３）自殺対策としての生活困窮者支援に関する研究

２．研究活動の概要

（１）中年期の人の Successful Aging に関する研究

（２）高齢者の就労支援に関する研究

上記、２点については、新型コロナウィルス感染症対策及び緊急事態宣言のため、研究が進捗しなかった。

（３）自殺対策としての生活困窮者支援に関する研究

「都市部における勤労世代の生活困窮者が適切な支援に繋がる総合的支援モデルの構築」の研究１として、東京都特別区人事厚生組合、東京都福祉保健局の承諾を得た後、東京都23区に５ヵ所設置されている生活困窮者自立支援施設の施設長に依頼し、協力の得られた４ヵ所においてインタビュー調査を実施した。生活困窮者自立支援施設に入居している生活困窮者と生活支援担当者に半構造化による面接調査を実施した。インタビューデータを逐語化し、質的な分析を行っている。

３．研究業績

【論文】

１）藤田幸司、松永博子：性的マイノリティ高齢者の課題と自殺対策、老年精神医学雑誌 32：530－537, 2021.　（査読なし）
２）藤田幸司、松永博子、Yong　Roseline：多世代参加型コミュニティ・エンパワメントの実践とその効果の検証：地域づくり型自殺予防対策への取り組み、日本世代間交流学会誌11（1）：23－30, 2021.（査読あり）

【学会発表】

1）松永博子、藤田幸司、藤原佳典：大都市において路上生活を続ける高齢者への新たな取組について：特別区人事・厚生事務組合と東京都による事業を通して、第16回日本応用老年学会（2021.11.6 － 7 ：Web開催）

2）松永博子、藤田幸司、佐々木久長ほか：地域住民における相談窓口等の認知状況と心理的苦痛との関連、第80回日本公衆衛生学会総会（2021.11.21－23：東京）

3）松永博子、高橋知也、相良友哉ほか：高齢労働者採用及び離職へのプロセス：都内介護施設におけるケーススタディ、第63回日本老年社会科学会大会（2021.6.12－ 7.31：Web開催）

【科研費などの助成金】

1）日本学術振興会　科学研究費助成事業　若手「都市部における勤労世代の生活困窮者が適切な支援に繋がる総合的支援モデルの構築」2020－2022年

連携研究員　三　澤　久　恵

1．研究課題

地域高齢者のスピリチュアリティに関する研究

2．研究活動の概要

2010年に作成した「地域高齢者のスピリチュアリティ評定尺度」を基盤として、スピリチュアリティの視点を持つ地域高齢者の健康生活の支援に関する研究に取り組んでいる。

団塊の世代が後期高齢者となる2025年、さらに寿命を迎えて亡くなる2035年まで、死亡者数は増え続け、2035年頃までには死亡者数のピークを迎えると予測される。2016年の健康寿命をみてみると、男性は9年間、女性は12.7年を何らかの援助や医療を受けて、日常生活を送ることになる。人々の願いは単に長寿ではなく、最期まで健康で自立して生活したいと望んでいる。そしてその先にはやがて訪れる死がある。今までのQOLの向上のみならず、QODを同時に考える必要が出てきている。

また、死亡場所の推移をみると、1980年頃から家庭で死を看取ることが少なくなっているが、最近、医療機関以外場所で亡くなる高齢者がわずかではあるが増加傾向にある。高齢者自らが、より望ましい最期を迎える志向が強まっていると考えられる。

2002年には最後の時をすべての人が愛されていると感じて旅立てる社会を目指し、「看取り士」が誕生している。死生学や老年学、看護学、スピリチュアルケア等の学際的な視点から、看取りを取り巻くケアチームの連携の在り方を検討していきたい。

3．研究業績

【その他の研究活動】

1）「日本看取り士会」所属

2）荒川区傾聴ボランティア団体「ダンボの会」所属

3）老年社会科学雑誌投稿論文査読

4）2021年日本健康医学会総会演題発表座長

連携研究員　山　岡　郁　子

１．研究課題

在宅介護中高年者の体力や身体機能が介護の負担感に与える影響

２．研究活動の概要

在宅での主たる介護者は配偶者が多く、老老介護世帯が多い。介護生活を継続していくためには身体的、心理的、社会的な要素が重要といわれている。

そこで在宅介護をしている40歳以上の中高年者31名の体力の１指標である体重支持指数が介護負担感と関係があるか調査した。

その結果、セルフケアを介護する時の負担感は、体重支持指数が低いほど増加する傾向がみられた点を以前報告させて頂いた。今後も引き続き調査していく。

調査を通していく中で，理学療法サービスが果たして効果的に被介護者に意味あるサービスとして提供されているのか，どのように実施されると被介護者や，主たる介護を行う家族にとって負担が少なくなるようなサービスとなるのかについても興味深く感じている.

３．研究業績

【著書】

１）分担執筆：基礎編　ケースで学ぶ理学療法臨床思考　第３章　内部障害理学療法
27閉塞性動脈硬化症．文光堂

【その他の研究活動】

１）「介護者のための運動学」、すずらん介護福祉学院特別講師
２）「高齢社会における理学療法」、高校生向けキャリアガイダンスセミナー講義
３）千葉県富里市介護保険審査会委員
４）猿田の丘なでしこでの救護棟利用者と生活指導室職員への転倒予防講師

連携研究員　吉　江　妙　実

１．研究課題

音楽療法と高齢者の健康に関する研究

２．研究活動の概要

「音楽療法による一般高齢女性の嚥下機能における経年変化」、
「一般高齢女性における音楽療法と発声への関連」についての研究を継続中。

３．研究業績

【その他の研究活動】

１）2021年４月18日：日本応用老年学会　芳賀 博先生記念講演
２）2021年７月18日：日本音楽療法学会主催スーパーバイザー養成講座（基礎編Ⅱ－１）
３）2021年９月25－26日：第21回 日本音楽療法学会学術大会
４）2021年10月２日：第24回 日本保健福祉学会学術集会
５）2021年10月３日：日本音楽療法学会 国家資格化勉強会
６）2021年11月６－７日：日本応用老年学会（シンポジウム）
７）2021年11月６日：日本音楽療法学会主催スーパーバイザー養成講座（基礎編Ⅱ－２）
８）2021年11月17－18日：日本音楽療法学会関東支部大会
９）2021年11月21日：日本音楽療法学会関東支部大会総会
10）2021年11月26日：日本音楽療法学会 第２回 国家資格化勉強会
11）2022年３月19日：日本音楽療法学会主催スーパーバイザー養成講座（基礎編Ⅱ－３）

連携研究員　吉　田　綾　子

１．研究課題

ケイパビリティ・アプローチの視点から見た現代社会における社会福祉に関する考察

２．研究活動の概要

イギリスにおいては、高齢者・障碍者の分野でケイパビリティ概念の観点からアウトカム評価指標の作成が行われており、このような研究はイギリスだけでなく、日本やそれ以外の国でも広範囲にとりくまれるようになっていることが明らかになった。以下、日本における研究事例を紹介する。

１）長澤紀美子：「ケイパビリティ」概念に基づく認知症高齢者ケアのアウトカム評価尺度の開発科学研究費助成事業　研究成果報告書．2018

この研究では、ケイパビリティの概念に基づき、認知症高齢者に対する自立支援の効果評価のための要素や手法について検討している。さらにイギリスにおいて、ケイパビリティ概念に基づき作成されたアウトカム評価指標（Adult Social Care Outcomes Toolkit：ASCOT）の施設版を、日本の介護現場に適用する際の意義や課題を整理している。

ASCOTはAmartya Sen のケイパビリティ理論に基づき、従来のアウトカム指標で扱っていた「機能」だけではなく「ケイパビリティ」に着目した指標である。たとえば、領域「個人の清潔さと快適」では、『清潔な状態に保たれている』という「機能」だけではなく、『本人が清潔に感じ、自ら好む身だしなみができている』というよう個人の自由と志向性に着目している。

２）一橋大学経済研究所：トランス・ポジショナルなケイパビリティ指標の作成に向けた国際共同研究．2014～2016．https://www.ier.hitu.ac.jp/brains/Japanese/index.html

この研究では、近年注目されているケイパビリティ・アプローチを、ＧＤＰや幸福などの一元的指標を超えて、個々人の多様性や機会の不自由さなどに直接接近し、政策や社会状態を評価する方法であると定義している。そして、国内外の異なる領域、異なる分野で独立して進められているケイパビリティ・アプローチの定式化を目指して、相互に比較・検討することから始めている。

連携研究員　樂　　冠　妤

１．研究課題

生活習慣パターンと認知機能との関連：地域在住高齢者を対象として

（１）潜在クラス（Latent class analysis）を用いて高齢者の生活習慣パターンと認知機能との横断研究。

（２）潜在クラス軌跡解析（Latent class trajectory analysis）を用いて高齢者の生活習慣パターンと認知機能との縦断研究。

２．研究活動の概要

認知機能に関わる要因は多様であり、認知機能低下を促進する要因もあれば、抑制する要因もある。実際の日常生活においては、一人ひとりがプラスに影響する健康行動とマイナスに影響する健康行動を組み合わせた様々な生活習慣を持っており、それらが相互に関係しながら認知機能と関連すると考えられる。

本研究では、「国立長寿医療研究センター・老化に関する長期縦断疫学研究（National Institute for Longevity Sciences-Longitudinal Study of Aging）の第３次調査から第７次調査（2002～2012年）に参加者のうち60歳以上のデータを用いており、倫理審査を行って承認された。現在、データを解析することを進めている。

３．研究業績

【論文】

Original Article

１）Kuan-Yu Yueh, Hong-Jer Chang, Hsing-Yi Chang: Cognitive Function and Its Risk Factors in a National Survey of Older Adults in Taiwan: A Latent Class Analysis. International Journal of Gerontology 2020；14（4）：332－337.

【その他の研究活動】

1）みんなの老年学研究会「死の授業」に参加（2021年６月６日に開催された）。

2）桜美林大学老年学総合研究所の同窓会講演「恩師　柴田博先生を囲み老年学を語る会」に参加（2021年８月７日に開催された）。

3）ILSA-J（Integrated Longitudinal Studies on Aging in Japan）研究会に参加（2022年２月10日に開催された）。

4）JAGS（Japan Gerontological Evaluation Study；日本老年学的評価研究）研究会に参加（毎月一回）。

5）SC（Social Capital）研究会に参加（毎月一回）。

令和３年度　研究活動報告

発　行：桜美林大学 老年学総合研究所
〒194-0294
東京都町田市常盤町3758
TEL. 042-797-2661(代)

発行日：令和4年3月31日

編集：（有）片野印刷